

上地の風（第八号）

ふるさと上地
5

岡崎市立上地小学校

上地の風(第八号)

ふるさと上地
5

岡崎市立上地小学校

はじめに

上地学区は上地小学校とともに、若松・上地両区画整理事業によって、九年前に誕生しました。初めは、学区人口四三〇〇名、小学校児童五八〇名でした。その後、今日までの発展は目覚ましく、学区人口八二〇〇名、小学校児童九六〇名となり、創立当時の約二倍にもなっています。こういう傾向はこれからも続き、現在も一七九ヘクタールの上地学区あちこちで、建設の槌音が聞かれます。

また、これと並行して、総代会・社会教育委員会はじめ、各種団体を中心に「ふるさとづくり」の運動が活発に展開され、着々と成果をあげていることは、大変喜ばしいことです。

小学校も、この趣旨にそって、PTAの皆様とともに、「学校づくり」を進めてまいりました。その様子は、月々の「学校だより上地」でお知らせしておりますが、ここに本年度分を集約して『ふるさと上地 第五集』として発刊することになりました。

学区学校創立十周年を目前に控え、記念像「ふる里上地」が完成した記念すべき年に、このような冊子ができることは実に意義深いことであると思います。終わりにりましたが、格別ご援助いただいております総代会長成瀬司様、社会教育委員長柴田勝様はじめ、ご支援下さいましたすべての皆様方に深くお礼申しあげます。

平成四年三月

上地小学校長 嶋田 稔
P T A 会長 鈴木 豊

目次

一、ふるさとシリーズ

一、大谷公園に展望台が完成	1
二、初夏の上地湿原を訪ねて	8
三、初夏の上地湿原を訪ねて	12
四、ふしぎな白へび△創作童話V	18
五、改修工事二十年後の奥山田池のコイを追って	23
六、東海金属工業株式会社を訪ねて	31
七、晩秋の砂川にコイの群れ	41
八、上地郵便局	47
九、明日の上地農業を考える	51
十、ドミールを訪ねて	55
十一、大谷坂のためき△創作童話V	61

二、校長通信

一、笑顔でスタート新学期	65
二、本はともだち	68
三、委員長さんに聞く	71

三、教室の窓

四、みんな大好きクラブの時間	75
五、結果はあとからついてくる	78
六、生命の尊さを知った授業	80
七、本を読む楽しみを	83
八、学区・学校創立十周年記念事業によせて	85
九、かみかみ運動・けがの功名	87
十、学芸会を終えて	90
十一、クラス編成を改善します	92
一、しゅうかい だいすき いちねんせい	95
二、みんな輝いてるね	97
三、先生、大変だよ	99
四、うちのカレーより おいしくできたよ	102
五、わずか四分「天地創造」の華	105
六、もう一泊したいなあ	108
七、かぎりなくやさしい日々のために	111
八、おかあさんはいそがしいね	115
九、「おれはチョコレート」の話を劇に	118

四、 学学校ニュース

十、 やればできるんだよ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 122

一、 ベルマーク運動の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 125

二、 ボア タージ（今日は）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 127

三、 第2回上地学区親子夏祭りに約3000人・・・・・・・・・・・・・ 133

四、 悲しい事故を教訓に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140

五、 上地小 同窓会発足・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 142

六、 交通安全教室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 143

七、 耳鼻科講話会開く・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 147

八、 十周年バザー開かれる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 150

九、 「もみじ読書」と親子ふれあい読書・・・・・・・・・・・・・ 153

十、 小学校陸上競技大会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 157

十一、 着々と進む十周年事業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 159

十二、 上地っ子文化祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 160

十三、 耐寒かけ足・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 162

十四、 「ふる里上地」除幕式・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 164

十五、 ふれあい牧場だより・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 166

五、 寄稿

一、 確かな手ごたえ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 193

二、 ソニー幸田見学会に参加して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 195

三、 耳鼻科の疾患と子供の病気①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 197

四、 耳鼻科の疾患と子供の病気②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 200

五、 耳鼻科の疾患と子供の病気③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 203

六、 インディアカ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 207

六、 ふるさと上地九年の歩み シリーズ

一、 五十八年開校当時の学校緑化に託したもの・・・・・・・・・・・・・ 209

二、 南公園のプールを借りて全校水泳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 216

三、 雨が降っても二時間で使える運動場を・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 222

四、 上地小学校開校への歩みをたどって ①②・・・・・・・・・・・・・ 230

五、 上地小学校開校時の思い出①②③④・・・・・・・・・・・・・ 240

六、 上地小学校の沿革をたどる①②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 251

一、ふるさとシリーズ

一、大谷公園に展望台が完成

大谷公園にまた一つ名所ができました。

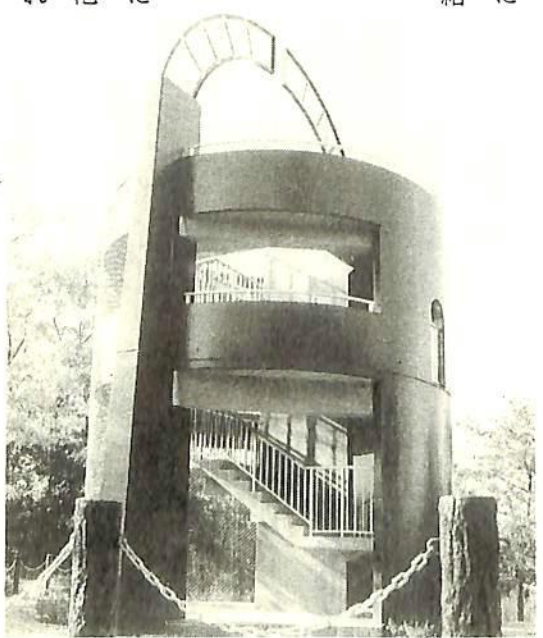
名倉嘉章

上地八景の一つである大谷公園に、噴水やキャンプ施設、東屋に
続いて、また一つ新しい名物ができました。銅鐸の形をモチーフに
した展望台の完成です。今回のレポートは、この新しい展望台の紹
介を中心に、大谷公園を今一度眺めてみたいと思います。

一、大谷公園展望台の持つ意味

銅鐸刑主展望台に託す思い

大谷公園は、五一年から開始された第二上地土地画整理事業に
よって生まれました。標高四〇メートルの、緑豊かな小山とため池
よりなり、急速な発展を遂げた上地学区の、区画整理以前が偲ばれ
る広さ二・三ヘクタールの近隣公園です。園内には、散策のための
遊歩道もあり、休日には家族連れが散歩したり、小学校の児童も自
然学習や集会活動にと利用する、自然の森を生かした公園です。



完成した銅鐸の形をした展望台

この大谷公園に展望台が作られることになった経緯を、岡崎市作成の『大谷公園展望台計画報告書』の「業務概要」から拾ってみました。

岡崎、そしてこの大谷公園の持つ、水や緑の自然景観の良さと、自然の中に作られた噴水や橋の人工的造形美の織りなす素晴らしい眺めを生かすためにさらに、この地域にとってシンボルとなるにふさわしい展望台を、大谷公園の中の見晴らしの良い緑に包まれた小高い丘の上に計画し、自然景観を損なわない造形美を持ち、眺望を考慮した、末永く市民に愛され、親しまれる公共施設としての設計を行う。

新設された展望台は、鉄筋コンクリート造り。高さ十一・五メートル、直径六・五メートルの円筒型で、弥生時代に祭器として用いられたとされる青銅器、銅鐸（どうたく）をイメージして設計されています。

なぜ、銅鐸の型の展望台なのか。銅鐸型の展望台に託された思いも、前述『大谷公園展望台計画報告書』に見ることができません。

この岡崎には、歴史的・文化的財産が多く見られる。岡崎上などの史跡。古くは、先土器時代から、縄文・弥生の遺跡も多く、出土品の宝庫である古墳からは、銅鐸・埴輪（はにわ）・勾玉（まがたま）などが見つかっている。そしてここ、大谷公園敷地内からは、古竊（こよう）が発見され、お皿などの出土品も見つかっている。

このような歴史的背景から、この大谷公園の地下深くにも何かが埋もれているかもしれない。銅鐸や、埴輪、勾玉が出土するかもしれない。

たとえば、あなたの足下にあるかもしれない……。

そんな歴史への思いを大谷公園に秘め、このこ高い丘を勾玉のように造成し、「勾玉の丘」と名づけ、ここにどっしりと構え、歴史という過去、そして未来を見据えらるるような展望台を、今回は銅鐸というフォルムに託してみた。……（傍線筆者）

古墳から出土した銅鐸をモチーフにしたデザインによる展望台は他に例もなく、学区内外から話題を集めています。公園の新しい顔として、ランドマークとしての展望台の役割とともに、それを見るものが歴史への思いをいっそう沸き立たせられるものとなっています。

一、平安の空跡に思いを寄せ、公園内を歩く

銅鐸型展望台の話で、歴史的興味がそそられたところで、さきほどの『大谷公園展望台計画報告書』の中にも出てきた、大谷公園内の平安時代の窯跡について触れつつ、大谷公園の紹介をしたいと思います。

上地学区内には、平安時代の窯跡が三つあります。旧地名による上矢崎（九区）、下矢崎（九区、奥山田池）、堤ヶ入（十区、大谷公園内）にありました。岡崎市内の窯跡が、他に古墳時代のものが一つ、時代が新しくなって鎌倉時代のものが三つ計七つ発見されているのを見ると、上地学区は岡崎市内の古代窯跡の宝庫と言えらるると思います。

昭和五八年、勤労福祉会館周辺の区画整理によって上矢崎の窯跡が宅地造成されることとなりました。その際岡崎市によって発掘調査が行われています。登り窯と呼ばれるこの窯跡のしくみについては、『上地の風(第二号)ふるさと上地』に詳しく述べてありますので、ぜひご参照下さい。またこの大谷公園内の堤ヶ入の窯跡について、本校職員による窯跡発見の様子も掲載されています。

・・・大谷公園の北側山中に入っていきました。衣浦線から、北の山中です。急斜面を下りてから二度山頂を目指して登ります。人が通った形跡はなく、蜘蛛の巣が張ったままになっていたり、落ち葉にも人の気配が残っていません。久しく上地の人から遠ざかっているのでしょうか。焼き物の破片だけでも、木の枝をかき分け落ち葉を返しながら、細心の注意を払って頂上を目指して登り続けました。しかしここでも、それらしきものが現れてきません。とうとう勤労福祉会館を始め、若松方面が一望できる頂上に立ってしまいました。

「確かこの辺りだと思ったのですが・・・。」

鈴木さんが困惑気味に探し回って下さいます。と、しばらくして、と十一時三十分。

「あった、これだ！先生！・・・(中略)・・・辺り一面から出てきます。焼台、窯の壁と見られる焼けた土片、甕(かめ)の破片・・・千年を越える過去の上地が、顔を現わしました。感激の一瞬でした。」

発見当時の感動が伝わってきます。現在では、山中に一周一キロ以上の遊歩道が整備されており、窯跡を見ることができま

す。公園内は、岡崎市開発部公園緑地課の計画により、テント場を始め、炊事場、東屋、ベンチ、遊具と施設も整備されてきま

した。公園内の大谷池には、上地第二区画整理組合の記念事業、『平成の泉』と名づけられた大きな噴水があります。池にかかる眞道衣浦線の橋、もちろん展望台とともに、自然の中に溶け込んだ人工美を見つけに、公園内をぜひご散策下さい。

二二、展望台ムロに登る

順序は少し前後しましたが、実際に展望台に登ってみました。温かな春の日差しを浴びながら、六年生の子どもたちといっしょです。山頂に作られた「勾玉の丘」には、小さな石が敷き詰められて、大きな銅鑼がそこにどっしりと腰を下ろしています。

展望台を見るなり、多くの子が、

「なぐんだ、小さいなあ。」

と口々につぶやきます。無理ありません。子どもたちの多くは、多くの観光地にあるような大規模なものを想像していたようです。しかしその声も、一段一段展望台頂上に登りつめて行く中で消えていきました。緑の林の中から広がる青い空と、遠くの景色にしばし声も出ません。山林の北東部を除き、二百七十度の眺めです。北は、南公園から学区の端まで、南は医療刑務所を望んで幸田町の山、ことに西側に広がる広大な平野の眺めにうっとり顔の様子です。

ようやく落ち着いたところで、矢継ぎ早に質問です。

「あの山はどこですか?」「西尾市の羽角山だよ。」

「あっちの大きな鉄塔は?」「刈谷市の依佐美の鉄塔らしいなあ。」

「この山はどうなるの?」「大型スーパーが進出予定で、ここまで買取済らしいよ。」

歴史的なモニュメントの上で、話題は上地学区の未来の話になって行きます。

「まだまだあんなに家を建てているんだね。」

「空き地があれだけあるんだもの、まだ人口が増えると思うよ。」

「衣浦線が通じたら、もっと車が増えるよ。大きな店ができて便利になるかなあ。」

「便利になるのはいいけれど、大谷公園みたいなところを残しておかなくちゃあ遊び場がなくなるね。」など。

自然の中に調和した銅鑄型展望台は、子どもたちに先人の遺産を語り継ぐだけでなく、上地学区の未来を語らせ始めたのでした。

『展望台から見える建物』

六年二組 梅田 陽子

大谷公園に展望台ができた。私はそのことを知った時から、一度見に行きたい、登ってみたい、そう思っていました。そして今日展望台に登ることができました。展望台から真っ先に見えたのが、上地小学校です。運動場を見たら、上地っ子が元気に遊んでいました。そしてもっと遠くのほうを見ると、山や家、いろいろな建物が見えて、幸田の方までずっと見えます。それに大谷池、噴水が出ていてとってもきれいだなと思いました。

まわりは森で、気に囲まれていて、空には鳥が飛んで、心がとってもおだやかになって、とってもいい気持ちでした。高さは家の三階から四階かな？樹木の観察などもでき

て、風も当たって、こんなにいいところなんだから、みんな一度は来てほしいなと思いました。

ゴミなどを出さないように、みんなで楽しめるところにしたいな、そう私は思いました。

四、上地の新夕所誕生

銅鑄型展望台の南北は、材質感の異なるメタリックとコンクリートを用いることで、歴史と未来に発展する岡崎を表現し、左右の二本のコンクリートの柱は、東西の軸線上に位置し、時間の変化を象徴しています。（『大谷公園展望台計画報告書』による。）展望台に登り、しばし上地の過去と未来に思いを馳せて見られてはどうでしょうか。

上地の新名所、大谷公園の銅鑄型展望台をぜひお訪ね下さい。

（おわり）

上地湿原との出合い

私が初めて上地湿原に行ったのは、上地小学校に赴任した昨年の四月のことでした。本校新任者による「上地八景めぐり」で、奥山池や大谷公園などといっしょに紹介され、最も自然を感じさせられたので、すぐに気に入りました。池というよりは沼で、水はよどみ、自然をそのまま残してあるような所だったからです。その時の魚の飛びはねた波紋や、草木の映る水面の穂やかさが今でも思い出されます。また、幸田の田畑や三ヶ根山まで見渡せる景色のよさも、とても印象に残っていました。

上地湿原の位置と概観

この湿原は、幸田町との境にあり学区最南端に位置し、二つの池からなっています。一つは常時水をたたえ、一つはすべてをアシ（ヨシ）などに覆いつくされています。しかし、これらは独立しているのではなく、排水路により人工的につながり、鳥たちの行き来などで自然に一体となっています。

住宅開発が目の前まで迫っている中で、この一帯だけが原始に近いの自然を保っています。周りを植物で囲まれ、ここをえさ場にして野鳥の楽園です。また、長く住み着いて離れない魚や亀、水中昆虫などが見られます。

近くに中部電力上地変電所がありますが、近代施設と自然がおもしろい対照を示しています。

五月初めの上地湿原

① 日に映る植物

ここを訪れるのも三か月ぶりです。以前は北風が吹き、水辺のアシやスキの穂が揺れ、水面はとても荒れていました。しかし、今はずいぶん様子が変わりました。枯れたアシやスキの穂の下には、背丈とした若葉が生え始めています。周りの土手には、スイバが赤い花をつけ、セイタカアワダチソウはまだ背丈も小さく葉を生やし、クズはつるを伸ばし始め道に出てきそうな勢いです。ヨモギやスギナも大きくなっています。しかし、これらの雑草もまだおい茂っておらずとてもいい雰囲気を出しています。その中で、ひときわ目を引く花があります。黄色の花をつけたハナシヨウブです。十ぐらいの花をつけたかたまりが三、四あります。枯れ穂の中なので目立っていて、とてもきれいです。

② 水の中の様子

朝ここを訪れると、とても穏やかで気持ちも落ち着いてきます。近隣の人たちの散策コースとなっているようで、犬の散歩に来ている人たちや、小さな子どもを連れのお父さん、老夫婦にも出合いました。

ゆっくり歩いていると、思わず声を出してしまいそうな、ほほえましい姿を見ることができました。それは、排水口のコンクリートの斜面の一方に四匹、もう一方に七匹もカメがこうら干しをしているのです。数の多さにも驚きましたが、自然の中で生きるものの賢さも感じました。夜の間冷えた体を温めるのはわかりますが、きちんと太陽の光が直角に当たるような場所を選んでるんですね。

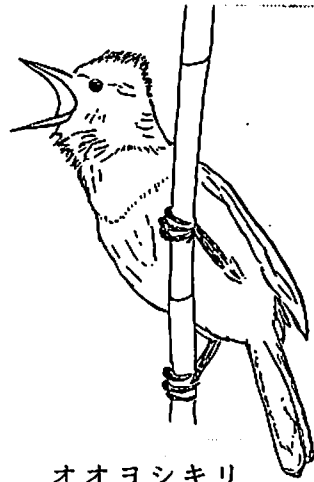
時々、魚の飛びはねる音に驚かされました。そこから波紋が広がり一層水の穂やかさがわかります。岸边には、えさを探す魚影を見ることができ、朝の気分といったところでしょうか。これらは、比較的大きな魚で、コイかフナでしょう。

では、実際に水の中は見えませんが、ここに住んでいそうな魚を予想してみましよう。すぐ近くを流れる柳川を調べたところ、フナ、タナゴ、ドジョウ、メダカ(カダヤシ)、カワムツ、クチボソ(モツゴ)、モロコ、ヨシノボリやブルーギルも一びきずつ採れました。すると、フナ、ドジョウ、メダカ、クチボソ、モロコは確実にいると思われる。そして、コイもいるでしょう。ただ、ブルーギルやブラックバスが入っている場合、タナゴはいるかどうかわかりません。

「上地八景めぐり」での話によると、ナマズもいるのではということでした。池の雰囲気からもいそうだし、ぜひいてほしい魚です。また、ライギョもいるかもしれません。一度、調査してみたいと思います。

③ 羽根を休める野鳥たち

水面を見ていると、聞き慣れない鳴き声が聞こえてきます。よく耳を傾けてみると、「ギョギョッシ、ギョギョッシ、ケケシケケシ」などと聞こえます。オオヨシキリです。大きなさえずりなのでその姿を探したくなります。ヨシの中をよく見ると、穂の先やその間を飛び回っているのを見つけたことができます。双眼鏡なら、大きな口を開けて鳴いている姿を見ることができそうです。水辺では、水鳥たちを見ることが出来ます。有名になったカルガモが泳ぐ様はとても愛嬌があります。その中で少し大きい黒い鳥を見ることが出来ます。警戒心が強いのか、近づくとアシの中に逃げ込んでしまいます。少し待つと出てきたので、双眼鏡で見るとバンでした。ここで初めて知った鳥です。また、水面すれすれにはツバメが飛びかい、ハクセキレイが気ままに飛んでいます。近くの田んぼからはキジの鳴き声が聞こえ、隣の空き



オオヨシキリ

地ではムクドリがえさを探しています。鳥たちが羽根を休めるのに、絶好の場所となっているようです。

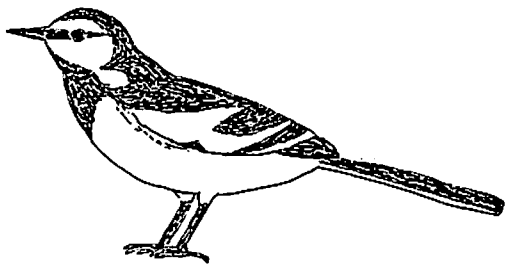
さて、湿原やその周辺に集まる初夏の野鳥についてももう少し詳しく触れておきましょう。バード・ウォッチングの参考にしていただければ幸いです。「オオヨシキリ」は、黄褐色のスズメより少し大きい小鳥です。夏鳥としてあし原に渡来し、ギョギョッシ、ギョギョッシケケシケケシなどと大声でさえずるので俗に「行々子」(ぎょうぎょうし)と呼ばれ、ゆれるアシにとまって赤い口を開いてさえずっています。「バン」は、黒褐色でくちばしが赤い中形の水鳥です。黒い体のわきに白い部分があります。湿地、水田などで繁殖し水面を前後に振って泳ぎ、草の中でクルルと鳴く声は俗に「バンの笑い」といわれます。夏鳥です。

「ハクセキレイ」は、岡崎の市の鳥です。黒と灰色と白のセキレイでとまると尾をよく振ります。また、チュンチュンと鳴きながら大きな波形をえがいて飛びます。

「ムクドリ」は、くちばしと足が目立つオレンジ色で、腰が白い灰褐色のスズメとハトの中間の大きさの鳥です。地上をのこのこ歩いてえさを探す様はとてもかわいらしく、頭と腰の白が目立っています。

ほかに、「カラス」「サギ」「カモ」「ツバメ」を見ることが出来ますが、詳しい名前はわからないので調べたいと思います。今回、初夏の上地湿原を訪ねてみましたが、やはりここを訪れるのは、朝か夕方でしょう。

みなさんも一度ゆっくり散歩に出かけてみませんか。きっと新しい発見ができると思います。



ハクセキレイ

六月の上地湿原

五月の上地湿原に引き続き今月もここを訪ねてみましたが、五月の様子とずいぶん変わっていました。草の背丈が五月にはひざぐらいたったのが、顔の高さまでになっていました。一か月あまりでとても伸びていて、植物の成長力に驚かされます。もちろんこれを自然科学的に考えれば、この季節が生き物にとって最も成長する時であると言えるでしょう。

梅雨に入り、池の水も少し増え、水辺の小さい小さい黄色い花がたくさん目につくようになりました。

上地湿原に行ってみよう

子どもたちの中には上地湿原の名前を知っているも、どこにあるのか知らない子もいました。雨の多いこの季節。「晴れたら行こう」という条件があっても初めて行く所への興味は大変なものでした。
 (天気予ほうを見て、「晴れ」と書いてあつてから、とてもうれしかったです。)



小幡 朋史

4の2

茅野 博史

①仕掛け作り

今回は、池にいる生き物を調べる目的で行くので、図工の時間にペットボトルを利用した仕掛けを作ってみました。社会でごみの勉強をした時に、ペットボトルもごみの多い原因としてでたので、廃品利用のひとつの例として取り上げることができました。

②作り方

今後の参考に、作り方を説明しましょう。

- 1、ペットボトル(15ℓ)を一本用意します。
- 2、図1のように、一番ふくらんだ所に線を引きます。
- 3、線を対称にして4cmぐらいの間隔で、キリで穴を開けておきます。
- 4、線のところをカッターナイフで切ります。
- 5、図2のように、切ったものを逆にして穴に針金を通して縛ります。
- 6、ひもを結んで、でき上がりです。

わたしは、しかけを作る道具を持ってきて、さっそく作りました。まず、きりであなを開けて、カッターで切りました。その切ったさきっぱの方を入れ物の下の方に入れようとしたら、とちゅうまでしか入らなかったの、しっぱいしたなと思いました。

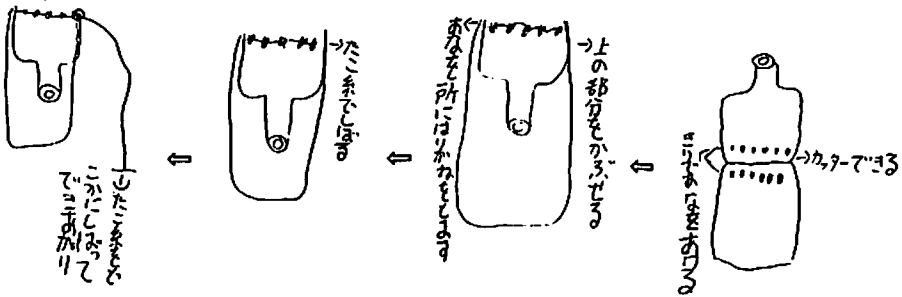


図 2

図 1

三谷 知絵

4の2

三谷 知絵

上地八景の一部へ行ってみたら、魚がいっぱいいるなと思いました。なぜかという、水がにごっていたからです。

4の2 藤原 久子

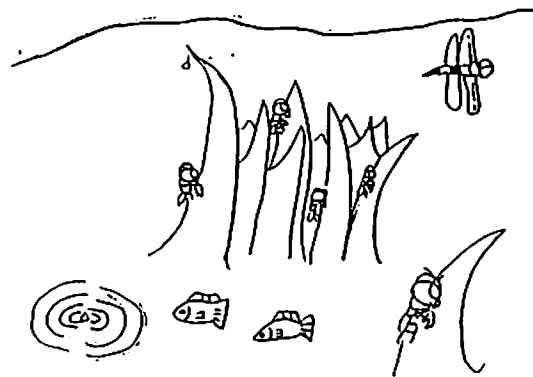
魚採りに行きました。先生が「女子はあぶないから、男子の勇気のある人、来て」と言ったから、ぼくは真っ先に先生について行きました。

4の2 小幡 朋史

ぼくは、上地湿原に行つて、メダカなどをとりに行きました。ぼくはあみをわすれてしまったので、バケツの所に行つてみんながすくつてきたのをとる係をしていましたが、余郷君があみをかしてくれましたので、一回すくえました。メダカが2ひきとれました。

ほかの子は、ヤゴもたくさんとっていました。草にたくさんヤゴのぬけがらがたくさんついていました。本当におもしろかったです。

4の2 齋藤 貴吉



齋藤 貴吉

柳川

柳川は、上地と幸田との境にある川です。比較的浅い川で、ザリガニやオタマジャクシなどが泳ぐ川です。

上地湿原に行きました。わたしは上地湿原は、もつと横ばが広くておくの方へ行くと大きな池になつていてと思つていたので、わかれていたのでびっくりしました。

やな川では、あんまりとれないと思つていたので、他の子が10cmくらいの大きなオタマジャクシをとつたりしていたので、わたしもアメンボぐらいならとれるかなと思つたので、やったら一度しつぱいしたけどとれました。でも、バケツに入れようとしたらにげてしまいました。

友だちが、「小さい貝みたいなものならとれるんじゃないの」と言つたらとれたので、バケツに入れました。とてもかわいかったです。学校に帰ったら水そうに入れました。何ていう名前の貝か知りたいです。

4の2 石川 真帆

水に入った時気持ちよかったです。アメンボのたいぐんもいました。人がとおると横とかへけます。アメンボは、人間を親分だと思つているのかなと思つていました。

学校に帰つて宇野君のとかを見たら、小さい魚がいました。ザリガニも2、3ひきいました。おどろいたことは、オタマジャクシのなかいかやつがいたことです。ぼくは、そんなに大きいのを見たことがないから、すごいと思つていました。少し暑かったけど楽しかったです。

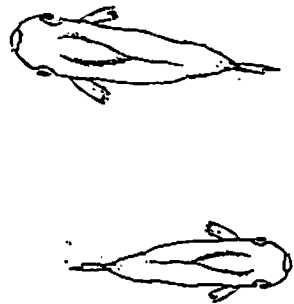
4の2 加藤 峻也

メダカを捕まえた

メダカといえば、誰もが知っている魚の名前でしょう。しかし意外とどんな魚か知らない人が多いのではないのでしょうか。フナやオイカワなどの稚魚のように、小さい魚のことをメダカと呼んでいたりする子もいます。ここで、メダカについて少しふれておきましょう。

田んぼや小川の中を群れになって泳ぐ小型の魚で、目や口が頭の上の方についているため、水面近くを泳ぎます。背中が平らで、上から見ると黒い細長のV型の模様があるので見分けがつきます。

私が子供の頃にはたくさん見られたメダカですが、農薬の使用や河川改修などで生息域がせばめられ、激減しています。岡崎市も例外でなく、探すのが非常に困難な状況です。もう「めだかの学校」のように歌われることはないのでしょうか。ところが、幸運にも2年生に引き続き柳川で4ひきも採ることができました。これは、上地の大発見といってもいいでしょう。



鎌倉 佳恵

メダカが卵を産んだよ

最後に、捕まえたメダカが卵を産んだので子どもとの記録を載せましょう。

やな川行った時に、めだかを四ひきつかまえました。その時、すこく

おなががふくらんでいました。学校に帰って、水そうに入れました。

つかまえてから四日ぐらいたったら、水そうの中のぼうにたまごを10こぐらい生みました。初めは、たまごをメダカのうんこだと思いましたが。先生に聞いて、たまごだということがわかりました。

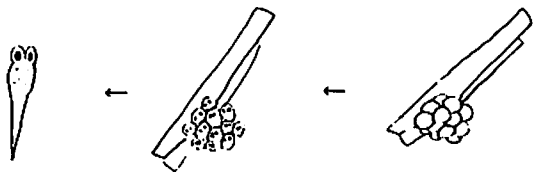
それから、五日ぐらいたったら、たまごの中に黒い点が二つ見えるようになりました。

10日ぐらいたったころ、たまごの中に小さなめだまが見えました。

次の日、学校に行ってみたら、たまごからでていて、水そうの中を泳いでいました。

観察してたまごの中にめだまができて、メダカになって泳ぐのを初めて見て、たまごからお魚になる様子がよくわかりました。

4の2 政木 まゆみ



山本 京子

今回の調査では、予想していた以上に採れた魚の種類が少なく残念でした。上地湿原では、フナの稚魚、ヤゴ、ザリガニ、タニシ、柳川では、メダカ、ザリガニ、オタマジャクシ、モノアライガイとあまり多く採集できませんでした。もちろん網に頼った採り方でしたが、もつと多くの種類になると思っていました。でも、上地湿原は、トンボの楽園だということがわかりました。ヤゴは多く採れましたし、アシにはぬけがらがたくさんついていたので、これも、いい発見です。上地湿原と柳川に、子どもたちと一緒に訪ねてみました。魚取りをあまりしたことのない子どもたちにとって、とても楽しい経験となったことを嬉しく思います。また、これを通して、「ふるさと上地」を感じてくれたことでしょう。

四、ふしぎな白へび 創作童話 V

ここは、上地の村はずれ、一本杉のひろばです。
ある春の日の午後、木の下で、子どもたちが、遊んでいました。
とっせん、

「キヤー。キヤー。」

と、女の子が逃げだしました。男の子が追っていきます。

「そうれ、そうれ。」

見ると、白へびをふり回しながら、男の子があとを追っていきます。

「キヤー。やめてえ。やめてえ。」

女の子がさわぐので、よけいおもしろがっています。

「イヤー。こわい。」

女の子たちはむこうの方へ、逃げて行ってしまいました。

しばらくして、どこからかしらがのおじいさんが、つえをつきながらやってきました。

「おいおい坊や、めずらしい白へびだな。どこにおった。」

「池のそばで、つかまえただよ。」

「そうか、そうか。わしもこの年になって、はじめて白へびを見た。話には聞いておったが、これがその白へびか。」



5-1 名兒耶良美

5-5 神谷志保

「そんなにめずらしいの。」

「そりやあめずらしいへびだ。でもな、これ、逃がしてやったほうがいいぞ。」

「いやだよ、おじさん。へびで遊ぶのおもしろいもん。」

「悪いことは言わん。逃がしてやらんと……。」

「逃がしてやらんと、どうなるの?」

「いいかい、白へびはな、昔から神さまのお使いということになっておる。いじめると、たたりがあるかもしれんぞ。」

「たたりってなに?」

「かみさまやほとけさまの、ばつのことだ。」

「へええ、ほんとう?」

「ほんとうだとも。」

「なんだか、こわくなってきた。」「せっかくなつかまえたけど、逃がしてやるか。」

子どもたちは、しかたなしに、へびを逃がしてやりました。

そのころ、土呂(とろ)福岡(ふくおか)の方から、吉良道(きらみち)を二人の旅人(たびびと)がやってきました。どうやら仕事で、東の方へ行くようです。

「上地八幡(はちまん)でゆっくり休んだので、つかれがすっかりとれたな。」

「あの大谷坂を(おおやざか)をこえると、もうすぐ藤川(ふじかわ)だ。」

「おや、へびだ。これはめずらしい白へびだぞ。」

「わしはへびを見ると、すぐいじめたくなる。」

「おれもそうだ。白くても、黒くても、どうもへびというやつは虫がすかん。」

「ええい、やっちなまえ。」

二人は、いきなりぼうきふり上げ、かわるがわるたたきつけて、大谷池へ投げこんでしまいました。

「さあ、これでいい。」

「行こう、行こう。」

やがて大谷坂まできました。まわりは、木がたくさん生えて、ひるでもつすぐらい道です。空も、くもってきました。坂のどちゆうまでくると、どういうわけか、二人とも、かおが青ざめて、いきがあらくなってきました。

「なんだか、さっきから気分が悪くなってきた。む、胸が苦しい……。」

「おれは、さ、寒けがして、体がふるえてきた。」

「こ、こりやいかん。どうにも歩けなくなった。」

二人は、ふうふう言つて、道ばたの木の根もとに、へなへなとすわりこんでしまつて、うんうんうなっていました。

そこへ、馬に乗つたお坊さんが、通りかかりました。

「お前さんたち、いったいどうしたんだね。」

「へえ、わ、わたしらは……。」

と、旅をして東の方へ行くこと、池のそばで白へびをつかまえて、半殺しにして池へ投げこんだこと、大谷坂まできたら、急に体がおかしくなったことなどを、しようじきに話しました。

お坊さんは、じつと聞いていました。そして、しばらく目をつむつて考えてから、口を開きました。

「ううん。これは白へびのたたりにちがいない。」

「へえ、そ、そんなことがあるのですか。」

「それしか思いあたることはない。私が、おいのりをして、おわびをしてあげよう。」

お坊さんは、じゆずを出して、お経(きよう)をあげて、おまいりしてくれました。

つぎに、馬のせなかのにもつから、薬を取り出して、飲ませてくれました。

「さあ、これでなおるはずじゃ。いいかな、旅のお二人さん、くれぐれも言っておくが、殺生(せつしよう)はいけませんぞ。」

「へいへい、ようわかりました。ありがとうございます。」

「へびをかまうことは、もうこりこりだ。」

二人は、まもなく元氣になつて、また旅をつづけました。

こんなこともありました。

「ゆうべ、夜中に、白へびが天井からばたんと落ちてきただ。びっくりして、目をさました。そしたらな、だいどころから煙が出ておった。早く見つけたから、すぐ消して大火事にならんでよかった。へびが火事を教えてくれたわけだ。」

「わしの家はな、へびがすみついたら、ねずみがいなくなった。今まで、ねずみに米だわらをかじられて困つたが、へびのおかげで大だすかりだよ。なにしろ、米は命のつぎにだいじなものだからなあ。」

「わしんこは、やしきにへびがすみついてから、おばあさんの病気が、だんだんよくなつてきたようだぞ。ふしぎなことがあるもんだ。」

このようなことがあって、村の人は、白へびをいじめなくなりました。それどころか、信心（しんじん）深い人が、大谷池のそばに、へび神社を作って祭ったりしました。

上地の一本杉の根もとには、ほんとに、白へびがすんでいて、近くのか藤信太郎さんは、見たことがあるそうです。昭和五十八年に、土地整理のため、この一本杉が切られると、いつのまにかどこかへ行ってしまうました。なお、へび神社は、公園が整理されたので、もういまはありません。

一本杉の白へびと大谷の白へびと、同じものかどうか、いまだにはっきりわかっていません。

（嶋田 稔）

五、改修工事二十年後の奥山田池のコイを追って

―夏休みの「調査」報告―

上地小学校 松原 昶三

「釣り人にとっても格好の池でもあります。コイ・ハエ・タナゴ・モロコ・ウナギ・ヘラブナの他に、最近では外来魚のブラックバス・ブルーギルなども住みついています。冬の陽だまりの中での釣り人の姿は落ちついた風情を感じさせてくれます。」

これは、平成元年三月に発行された「続 ふるさと上地」の中にある上地八景「奥山田池」解説の一節です。以前から、この奥山田池の魚、中でも、コイの群れに関心をもっていたこともあって、ぜひ一度、釣り糸を垂れてみたいと思っていました。こんな気持ちに、更に拍車をかけたのは、砂川に流れ出た三十センチを越す数十匹のコイです。オカリヨウさんの上流の泥の中にはつきりとした魚影を見えています。

「そうですね。決してきれいとは言えない、この流れによく生きていますね」

以前、学区をご案内した折、上地八景「砂川」の絵を描いて下さった岐阜県在住の加納睦久さんが、ふともらされたお言葉を思い出します。

さて、こんなわけで、今号では、奥山田池の魚（コイ）を追って取材をしてみました。予期しなかった発見に驚いたり、しぶとく、たくましく生き続けるコイたちに感激したりでした。夏休み後半のひととき、奥山田池に先生や子どもたちのにぎやかな声が響きました。

「腕ぐらゐの太さのウナギもいた」

「昭和四十八年頃から、砂川の改修が行われ、総延長八百メートルくらい（奥山田池から旧二百四十八号線にかけて）がコンクリートで固められたということです。若松、上地、さらには緑丘の区画整理が始まり、水的大量流出に備えての工事でした。」（平成三年三月発行の「ふるさと上地4」）

この砂川改修工事と関連して、昭和四十七年に、大規模な奥山田池の底さらえが行われました。当時、その様子をつぶさに観察された若松町総代の市川登様のお話を紹介します。

「それは、すごかったですよ。コイ、フナ、ドジョウ、タナゴなどたくさんいました。中でも、私の印象に残っているのは腕ぐらゐの太さの大ウナギでした。排水口付近では、まさに、大人と大ウナギの格闘です。どろだらけになつてウナギを追い回し、それは見事でした。大きなコイやフナもおつたでしょうが、ウナギに目を奪われていたので、はっきりとしたことは言えません。池の底をしつかりさらえましたが、生き残りがいるとすれば、よほど大きくなつているでしょうね。あの時以後は、池の北側にあるあらなぎさんが、時折、コイなどの放流をされていたと聞いています。それは、きつと大きく育つていくことでしょうね。」

この「腕ぐらゐ」というのは、決して大げさな話ではなく、大谷池のウナギでも同様のことが、区画整理組合の畔柳八百吉理事長さんや副理事長の畔柳市太郎さんによって語られています。

それは、ともかく、明治二十年にこの地域の砂防池として誕生した奥山田池です。この池が活動を開始してから、すでに百四年を経過していることに違いはありません。大ウナギや大ゴイは、池の主であるばかりか、明治以後上地百年の歴史を見てきた上地の主であるのかも知れません。

悪臭が鼻をつく真夏の奥山田池

「このヘラブナは、型がいいのですよ。尺ベラ（一尺以上の大型のヘラブナ）は、有料の釣り池でも、なかなか釣れません。しかし、この池は、ポイントと時期だけ間違わなければ、四十五センチを越す良型が釣れます。池が汚いぐらゐは辛抱しなければいけません。今じゃあ、どもへ行つても、そんなにきれいな池はありません。楽しいですよ。」
こうして、大型のヘラブナを求め、遠方からやってくる釣り師もいます。

「あれだけたくさんコイが、砂川に流れ出ているのだから、源（もと）の奥山田池には、必ず大ゴイがいるはず」
砂川クリーン作戦に学級ぐるみの挑戦を続ける六年生担任の名倉先生の言葉にも力が入ります。三十〜五十センチのコイが、オカリョウ付近の砂川で群れをなして泳ぐのを眼の当りにすれば、だれも同じ思いにかられることでしょう。
「まあ、とにかく、上地の主大ゴイ（八十センチ以上を期待）に挑戦してみよう」

夏休みも、残すところ一週間となった八月二十八日の午後、目的の奥山田池に出かけてみました。二間半のコイ竿、四号のミチ糸に三号のハリス、大ゴイに耐えられるタモと、準備だけは万端揃えての初の奥山田池釣行です。

池の西側に立って、驚きました。池の南西の端には、風で押し流されて集まってきたのでしょうか。浮び上がったヘドロが、幾重にも折り重なって緑の水面さえ見えません。ツンと鼻をつく、下水の悪臭。

「これは、ひどい。」

思わず、一言。

しかし、この日しか、もう夏休み中の釣りタイムはありません。目的のポイントであった、池の南側から池に沈んだ枯れ木の所は、浮かび上がるヘドロのために、どうにも糸を垂れることができません。

ポイントには枯れ木の根っこ

「教頭先生、何やっどる？」

女子バレーの子たちが二人。午前中の練習を終えて帰宅途中のようです。早速、池の西側で竿を出した私を発見して、声をかけました。

「コイがいるかどうか調べているところだよ」

「へえ、そんな汚いところにコイがいるの？」

やっと、浮き下の調節が終り、竿先を見ると、子どもたちの言葉がずしりと肩にかかります。「汚い」だけでなく、何とも、吐き気を感じさせるような悪臭です。

水深は、約一メートル二十センチ。本来なら、二メートル以上をねらいたいところですが、仕方なく、水中ですっかり枯れた木の北側に、「配合餌「大ごい」」を集中させることにしました。仕掛けは、二本針。万が一、コイが寄ってきたら、餌は、「いもようかん」に切り替えるつもりです。

池は、きつと真ん中にいけばいくほど深くなる「すりばち」状のはず。時には、大ゴイも回遊してくる場所と決め込みました。

それでも、コイは生きています

餌を入れ始めたのが、十二時四十分頃のことでした。二回、三回と、少し柔らかめに練った「大ごい」を打ち込むうちに、浮きが変化を始めました。

確かに、魚の食い込みと思われる。全長三十センチのヘラ浮きが、左右に、あるいは、ゆっくりと上下に揺れ始めたのです。

餌を代えるために針を上げると、ミチ糸にこびりついた青ん泥とヘドロが飛びはねて上着を汚します。と、水面から出ていた赤・黒・黄三色の浮きの模様がすーと池の中に入り込みました。

「きたー！」

ググッと引き込みながらも、大型の仕掛けにはかきません。固い先調子の竿で釣り上げられてきました。型は決して大きくありません。二十五センチ程度の野ゴイです。でも、ちゃんと一人前のヒゲがあります。

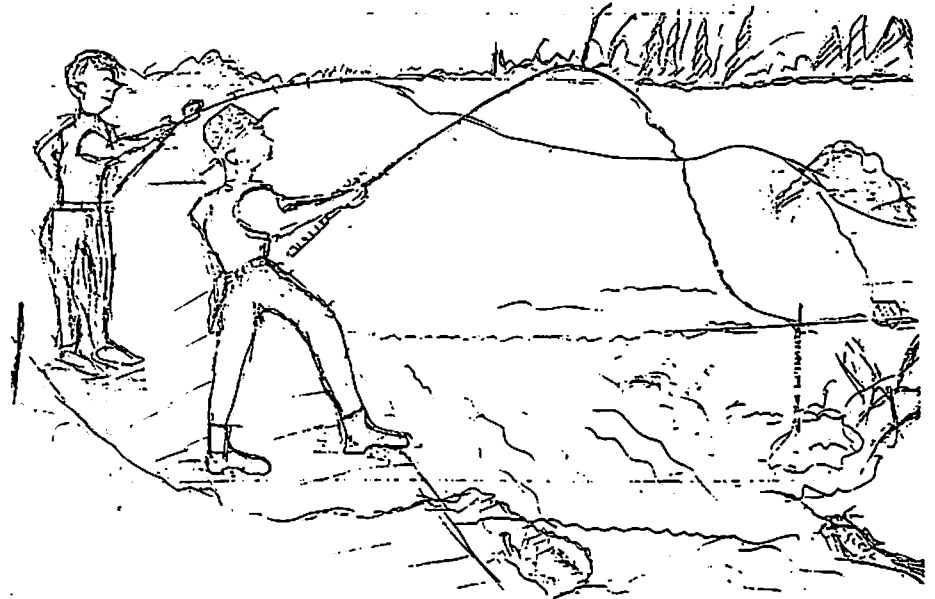
「ヘドロと悪臭」と、嫌悪された真夏の奥山田池にも、ちゃんとコイが生きていたのです。池の底には、まだまだ、コイの群れがいるようです。餌を打ち込むたびに、細かな、ゆっくりとした浮きの動きが続きます。まさに「入れ食い」です。

「やってますね、教頭先生。私も支度してきます。」

釣り好きな理科の松坂先生が、道路から池をのぞき込んで言いました。

「臭いけれど、慣れれば結構いいよ。」

「はい、すぐ来ます。」



岩瀬校務員さんによる大ゴイ「調査団」一行図

ロープでピクを固定し、大物に備える

程なくやってきた松坂先生は、南岸からリール竿で、枯れ木の東側をポイントに決めたようです。岸から、五、六間（十メートルくらい）離れた場がねらいなのでしょう。大ゴイが潜んでいそうな好ポイントです。さすがに、海釣りでも成果を上げている実力を感じます。

風向きが変わったのか、今まで汚れが目立っていた池の南西角から、ゴミがすっかり消えています。気のせいかな、慣れてしまったためか、悪臭もそんなに苦にならないようになってきました。

松坂先生の方にも、同じようなコイが当たりだし、ピクに入れられたこいが、中でバチャンと音をたてています。

「釣れます？」

今度は、学校へ車で行く途中、いつもは見られない奥山田池付近の騒々しさに気づいた酒井先生が声をかけました。

「わあ、釣れてきた！」

可愛い二人の子どもさんが、手すりから下を眺めて叫びました。松坂先生の竿先から、薄曇りの陽に照らされたコイのうろこが光りました。

入れ食い状態の忙しさから、気がつくと、岩瀬校務員さん、菅沼・長坂・田中・竹平の各先生たちがかけつけています。

「逃げるといかんで、ピクをロープでしばらく」と

岩瀬さんが、グリーンのロープを持ちに学校に走り出しました。

大ゴイがいつ来てもよい、助っ人や準備が整いました。

ドイツゴイも釣り上がる

「あれ、これは大きい」

「すごい、引きだ」

やってきた先生たちが、代わる代わる釣りに挑戦。ロープで固定されたピクも、いつの間にか、すっかり重そうに池の底に沈んでいます。

「おお、釣れた！」

「二匹、いっぱいだ」

「おottoとと」

釣果に歓声を上げる竹平・菅沼・田中先生。

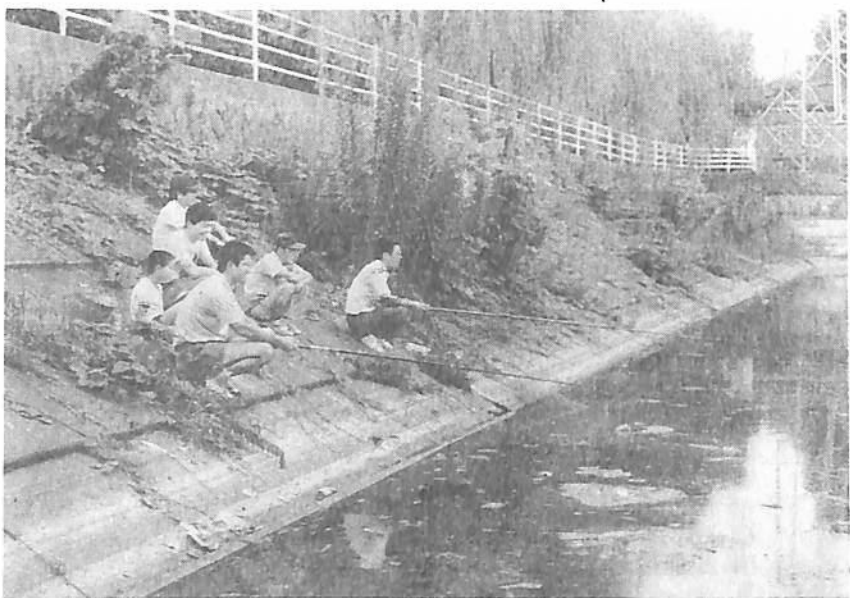
長坂先生が、五年生バレー部の加藤兄弟が挑戦中のブラックバスのルーアー釣りや先生たちの大ゴイにかける夢の「熱闘」をカメラで追っています。

「これは、何だ」

「うろこが無い」

「ドイツゴイだ」

納竿間近の午後四時半でした。思わぬ、珍種に巡り逢った驚



奥山田池の大ゴイ「調査団」一行

きの一瞬でした。

池の主、大ゴイは次女を見せず

「大ゴイは姿を見せてくれなかったけれど、これで終ろう」

時折、にわか雨にうたれながらも、三時間に及ぶ奥山田池の「主」

調査作戦は、真夏の夢と終わりました。

「それでも、あの汚れの中でちゃんとコイが生き続けている姿には感動です。」

「本当。驚きだね。きっと、大きなのがいると思うよ」

長坂先生と菅沼先生が、釣り上げてきた二十四匹のコイを学校の「なかよし池」に放流しながら瞳を輝かせて話しています。

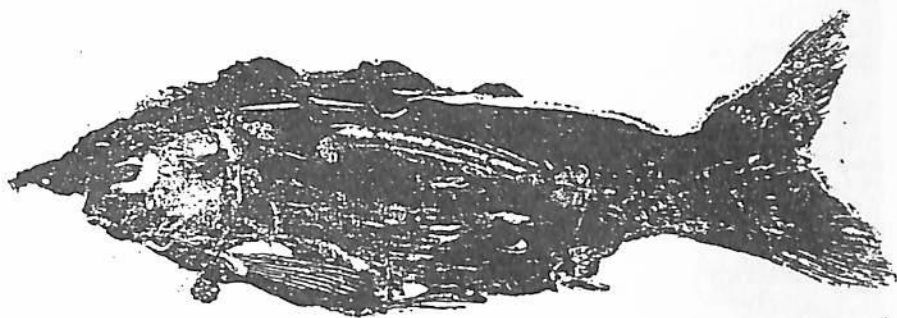
「池の水は汚いけれど、このコイはきれいだね」

「ちっとも汚れてないし傷も無い」

今日の釣行仲間たちが、なかよし池で、早速元気いっぱい泳ぎ始めたコイを見ながら、会話が続きます。

「越冬前の秋の荒食い時期をねらってみるか」

胸の中に新たな目標が、横切ったのは私だけではなさそうです。



早速魚拓におさまったドイツゴイの縮小コピー
(体長約1尺-なかよし池に放す)

十八、東海金属工業株式会社を訪ねて

奥村 武文

一、会社のプロフィール

上地小学校の正門を出て生協の前の道を進んで行くと、左手前方の、小高い丘のうえに、工場の屋根が見えてきます。これが、東海金属株式会社です。教頭先生からこの会社の話を聞かせて戴き、鉄の溶けるところや、作業工程の様子など自分自身、興味があつたし、社会科の学習で、子供達にも役に立つことがあると思ひ無理を言つて、見学させて戴くことにしました。当日は、私の他に、教頭先生、長坂先生、高山先生、名倉先生もいっしょに見学することになりました。私自身、ここには、なにかの工場があるということはこの会社の屋根を見て分かっていましたが、実際に見学に行ってみて、自分の目で見て、説明を聞いて来ると、びっくりさせられることが多かったのです。「学区の中にこんな会社があつたのか、知らなかった。」というのが最初の感想でした。詳しい見学の報告をする前に、簡単に東海金属がどんな会社かを知っていただくために会社のプロフィール(概要、沿革)を紹介しておきます。

◆概要

所在地 岡崎市若松町字向山三〇番地

代表者 取締役会長 大竹 庄二

創業 昭和一〇年九月

事業種目 銑鉄、鋼材などの製造並びに販売。銑鉄、銅及び軽合金鋳物の製造加工並びに販売。機械器具の販売

並びに販売

生産品目 ・ 紡織機部品、楽器部品（ピアノのフレーム）、一般産業部品、バルブ、コック部品、その他
 生産能力 月産量 八〇〇トン（鋳物製品で）
 工場の規模 敷地 三〇、一八六平方メートル 建物 九、一三五平方メートル
 従業員 八〇名

◆沿革

昭和一〇年九月 柴田兄弟鋳造所の名称を以て創立し工作機械鋳物を製造（明大寺町にて開始）

昭和二九年八月 商号変更により東海金属株式会社と称す（現在の場所に来る）

昭和三五年八月 設備近代化計画による鋳造工場を新築し自動連続砂処理装置一式を含む自動造型設備を完了した。

昭和四一年一月 設備近代化第二次計画による鋳造プラント一式の設置を完了した。

昭和四六年三月 自動造型用砂処理装置と長物造型ライン一式を完了した

昭和四八年一二月 公害防止対策として乾式のキュボラ集塵装置を設置した

昭和五六年二月 品質の向上、技術の向上の一環としてVプロセス鋳造設備一式を設置した。

昭和五九年七月 鋳造工場を新築、製造技術のより一層の向上と高度の品質を求め、Vプロセス鋳造設備二号機一式を設置した。

一、生産性向上に役立ったVプロセス

初めに、本社事務所で私達に説明をして下さったのは、技術部長の原田清英さんと専務の大竹健二さんでした。機械化されて来たのが昭和三五年頃からなので、それ以前は、機械の力でなく、人力で仕事を行っていました。ですから、従業員の人数も昔のほうが多く、その後徐々に機械化していき生産性を高めて行ったそうです。

特にVプロセス鋳造設備はこのあたりでもあまりない機械で生産性の向上に役立ったそうです。VプロセスのVはバキュームのVで吸引することです。鋳物の型を作るのは砂です。鋳物の砂は、適当な粘土を含んでいるものが良く、このあたりでは、知多半島の野間とれる、野間砂が最適だということです。

しかし、Vプロセスの発明により、さらさらの砂を特殊なビニールでかこみ、吸引して簡単に鋳型が作れるようになりました。フィルム（ビニール）で囲まれた砂を吸引し続けることによって、砂のあるところが、真空状態となり、砂と砂がびったりくつき固い鋳型が出来ます。この中にどろどろに溶けた鉄を流し込みます。鉄が冷め、この吸引をやめると、砂がつけなくなるので、崩れ落ち、砂の鋳型がなくなります。一五〇〇度近い温度の鉄を流し込んでいるのに、フィルム（ビニール）が溶



本社事務所

けないということが不思議で仕方ありませんでした。この機械を初めて見た時、従業員の方々も大変びっくりされたそうです。

この機械を発明された方は、業界の人ではなく、化学の研究をされていた方だそうです。この仕事をしている方にとっては、鑄型を作る砂は、粘土分を含んでいるのが当然という考えがあったので、さらさらの砂を使い、フィルム(ビニール)を使うという事は、画期的な事だったと思います。原田さんの説明からも、このVプロセスが発明され、いちはやく設置したということが大きな転換期だったことが分かりました。この機械は、一五年ほど前に日本で開発されヨーロッパ、アメリカにも輸出されています。画期的な発明だったということです。

二、鉄の原料

最近、日本の多くの製鉄関連会社は、オーストラリア、ブラジル、中国など外国から鉄の原料(鉄鋼石、鉄鋼石を加工した銑鉄など)を輸入しています。このような国から入って来る銑鉄は、日本のものより品質は落ちるそ

うですが、価格が安いということで輸入されているようです。

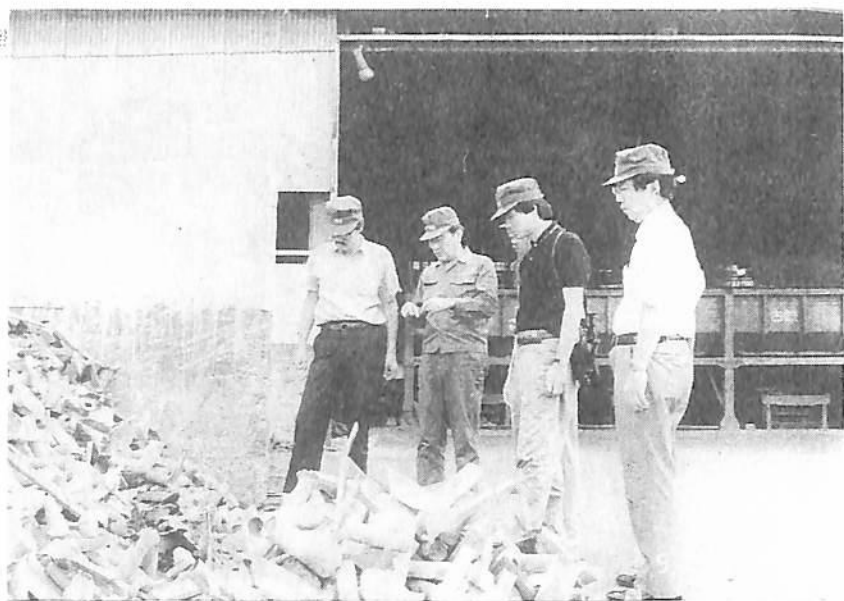
コークスのもとになる石炭も中国、オーストラリアなど外国からの輸入が多く、銑鉄など輸入物以外では、新日本製鉄、東海製鉄などのものを使っています。鉄板、合金鉄も原料として使います。色々な原料の殆どが輸入され、最近では、砂もオーストラリアなどから輸入するようにもなってきました。

一六〇〇度からなる鉄と接する砂は、大変な、耐火度を要求されます。原料置き場を見せてもらうと、なるほど、説明して戴いた原料が種類ごとに、うず高く積んありました。輸入された銑鉄、国内で作られた銑鉄、鉄板などのくず鉄、石灰石、コークス、などを見ると、鉄を作るには色々な原料が必要なのだということがよくわかりました。鉄というと、鉄鋼石を溶かして作るくらいのイメージしかありませんでしたが、見学してほんとはよく分かりました。

輸入銑鉄と国内銑鉄とは、私が見ても国内銑鉄の方



初めに全体説明を聞く



鉄くずの説明を聞く

が品質が良いということが分かりました。この点でも、日本の技術が優れているということがよくわかりました。

四、鉄の溶解

この原料置き場の目の前にゴーゴーと煙突のように何かを燃やしながら大きな音がしたものがありません。以前清掃センターで見た、燃やすところと、煙突がくっついていてる所に似ていました。これが、キュポラーです。鉄鉄などを、一六〇〇度で溶かしている様子を目の前で見ると大変な迫力です。先程見た原料が、火の力で溶けていると思うと火力の凄さ、恐ろしさを感じました。

この炉の一番下に、コークスを入れその上に原料を配合した物を入れます。そして、その上にコークスをまた入れ又その上に原料を配合した物というように、鉄をコークスでサンドイッチにして行きます。この繰り返しを四〜五回やると、ちょうど炉が一杯になります。炉の中でこれらの物が、溶けながら混ざりあっていきます。およそ、一〇時間くらいで完了です。一回この溶解を行うと



鉄鉄の山

炉がかなり痛むのでそのたびに炉の修理をします。炉は二基あって交代で使ったり修理します。

会社には、電気炉もありますが、溶解にはキュポラーを使っています。また、天然ガスを使って溶かす事をやっている会社もあるそうです。

五、溶解された鉄をVプロセスへ流し込む

いよいよ、炉から溶解された鉄を抜き取る作業を見ることになりました。どろどろに溶けた鉄が真っ赤になって、煙を上げながら、次々と出て来ます。とても高温で近付くのは危険です。これだけ近くで見ると恐怖すら覚えます。回りに火花も飛び散っていますが作業をしています。従業員の人たちはさすがに慣れていて、順序よく仕事を進めて行きます。この作業場は、ほんとに熱く感じました。従業員の方も、この季節の仕事は大変なことだと思いません。入れ物に一杯になった鉄が次々と運ばれて行きます。



4トン熱風水冷キュポラー

どろどろになった鉄をさましていくと表面に砂がついているのでショットグラストという小さな鑄物の玉を表面にたたき付けて砂を落とすそうです。その後でグラインダーで仕上げをして出荷します。東海金属工業では生産品目で述べたような物に溶けた鉄が変わっていきます。

六、仕事の苦労と課題

現在、岡崎では、鑄物の製造業者は八社くらいあります。以前は、もう少し多く一二社くらいあったそうです。東海金属でも以前は、なべ、釜、などを作っていました。鑄物業は、昔は、なべ、かま、はそり、フライパンなどの生活必需品から始まって、産業用機械、工作機械などに変わって来ているそうです。

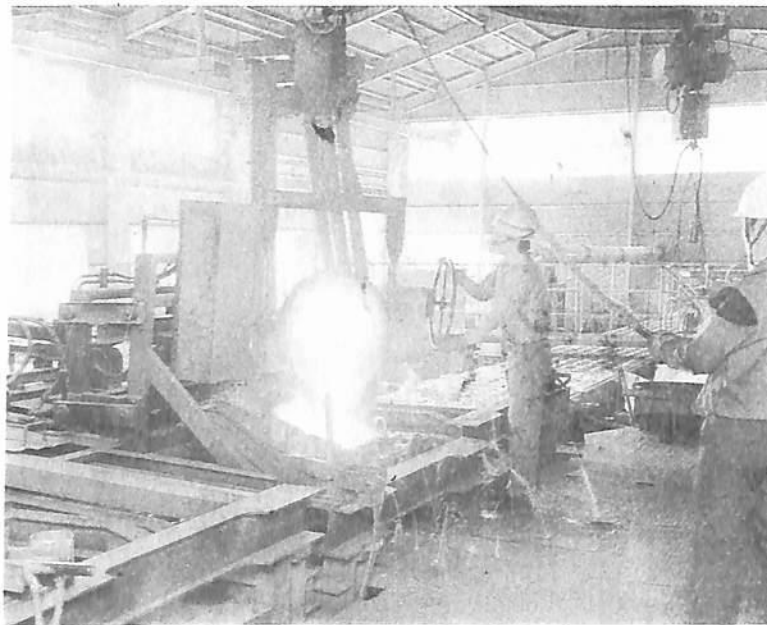
材質を調べるために、QCレコーダー（コンピューター）も採用しています。このコンピューターのある部屋は、二〇度くらいに保たれています。日本は、四季があつて気温、湿度が季節によって違うため材質が微妙に変わって来ます。ですから、材料の配分を変えたり、熱風の温

度を変えたりして、材質を保つように努力しています。

現在、鑄物業界では鑄物を強くするために、マグネシウムをいれて粘りを出すようなものをつくっている会社もあります。

鑄物は、その強度を買われて色々な物に使われています。自動車部品の細かい部品にも強度があるということで鑄物が使われています。工作機械は鑄物を使うと、ひずみがこない、振動を吸収するというので、鑄物が重宝されています。ピアノのフレームなどは、強度面その他に、鑄物の響く音にもポイントがおかれています。

このように現在でも鑄物を使ってみたらどうかということで、材質の研究が進んでおります。しかし、研究しできたとしても、すぐに製品になる訳ではありません。需要と供給のバランスによって、どういう製品にするかが決まって来るそうです。生産性の問題もあります。こんなものを作って下さいという注文もあるそうですが、やはり、採算面を考えて計画を立てるそうです。



VTK型Vプロセス自動造形ライン



フィルムを貼る作業

七、見学を終えて

見学している時、会社案内を開いてまず目についたのは、

- ◆ 高品質を誇る優秀製品の数々を
 - ◆ 技術革新は、次代に、さらに拡がっていく
 - ◆ 蓄積された技術をベースに独自の製品開発をめざす
 - ◆ 次代の変化に適應して、躍進する
- などのスローガンでした。

このようなことを目標に努力されているということが、見学の最中にもよく分かりました。常に生産性の向上を考え、時代に即応した製品の開発をしています。その時もいつも、採算ということが重要なポイントになります。時代の変化に適應していくためには、世の中の情勢を速くキャッチしなくてはいけないでしょう。日本や世界の情勢とも大きく関わっていると思いました。

五年生で製鉄業の授業をしたことは何度かありましたが今回のこの見学もきつと授業に役立ってくれると思います。

七、晩秋の砂川にコイの群れ

―奥山田池から流出か―

松原 暁三

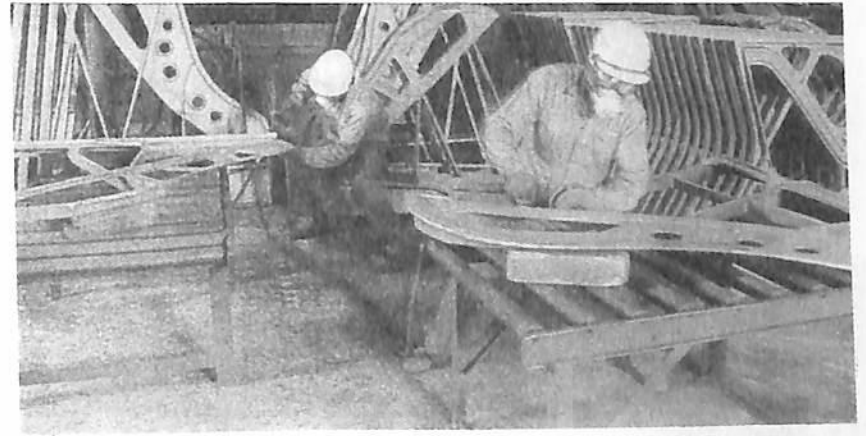
「水源を奥山田池に発し、広田川・矢作古川に流れ込み、やがて三河湾に注いでいる。春ともなれば、護岸堤防にタンポポの花も咲き、夕日に照らされた川面の美しさは思わず人を立ち止まらせる。」

これは、平成二年十月に発行された「上地八景えはがき」の砂川についての解説です。以下、朝夕の冷え込みに身をふるわせる十月末、砂川を二度三度歩いたレポートです。

一、学区を東西に横切る砂川

砂川は、勤労福祉会館西の奥山田池を源流にしています。生活雑排水流入による汚染が進行し、真夏には鼻をつく悪臭が「匂い公害」として話題をさらっていました。しかし、このところの冷え込みで、気のせいか池の水もやや澄んできたように思われます。こんな折、朝の登校指導に出かけた帰途、ふと砂川に目を移すと、コイの群れを発見してしまいました。もともと、コイ釣りが好きな私です。早速、子どもたちの登校時刻前のひとときを砂川探訪と意気こんでみました。

十月二十八日(月)の午前七時二十分、源流の奥山田池西堰堤に立ちました。



鑄造仕上工程

護岸堤防のわずか二、三センチの割れ目から、濃い黄色のセイダカアワダチソウが十数メートルにわたって茎高二メートル余で列をなしています。

と、中州では、岡崎市の鳥「ハクセキレイ」が可愛らしいぐさで尾をふりながらチツチとさえずっています。よく見ると、二つがいのようです。ヘドロで盛り上がった川底にも、セキレイのついでむ餌があるのでしょうか。

前夜来の雨で、流れに濁りが目立ちます。じっと、川をみつめても、それらしいコイの魚影はありません。

「雨で下流に流れてしまったのかな。せつかく、来たのに。」

思わず、ぐちが口をついてしまいました。

砂川河床の基盤強化のために敷き詰められた四角いブロックの間を小さな音をたてて流れていきます。

「こういう流れの所には、コイはいないはずだ。もうちょっと下流に行ってみよう。」

ひとり言をつぶやき、半ばあきらめ気分で川面を見すえてみました。しかし、まだ、いません。仕方なく、歩道からガードレールをまたぎ、雑草の茂る川岸にかがみ込んでみました。

いる、いる。体長三十センチから四十センチのコイです。とうとう発見しました。見れば、数匹ずつが、群れをつくっています。革靴の音が、敏感なコイたちに響いたのでしょう。さっと、汚泥の軌跡を残して一気に場所を変えて動きました。

北側と南側の川岸に身を寄せていたのでしょう。思わぬ「探訪者」に驚いて、あっちへ行ったりこっちへ寄ったり、安全な場を探しては動き回っています。そんな、コイたちの気分にはおかまいなしに、三つに別れたコイの数を確認してみました。

「五、六……十、十一、十五匹。」

「先生、何ですか。朝から。」

「いやあ、ちょっと。」

池の近くに住んでいらっしゃる杉山さんと出会ってしまいました。いつも健康管理に気を配っていらっしゃる杉山さんは徒歩出勤。

「何か、川にあるんすか。」

「そうです。コイです。ええ、この砂川は旧二四八号線まで、全長約一キロメートルありますが、そこにどうもコイの大群がおるじゃないかと思って、今から見に行こうと思います。」

「そうですか。それは、それは。楽しみです。」

こんな短い会話の後、国道二四八号線に向かって歩き出していました。

「じゃあ、お先に。」

杉山さんが、サークルK前の横断歩道を渡ったところで会社に急がれました。いよいよ、コイ探訪の開始です。

とうりおさばし

一、 一、 まさ通竹成橋の上には十数匹の群れを発見

二四八号線を東に渡ったところで「大道門・凡凡亭・松本屋不動産」の店舗西側護岸に降りました。昨夜来の夜露にぬれた路上駐車車が朝日に輝いています。パチンコ若松の北側に立って見ました。二四八号線の地下をくぐってきた砂川が第一の堰にぶつかり、せせらぎの音が耳に入ってきました。

「サー、サー。」

二四八号線から通筋橋まで百五十メートル程の間に、この群れです。流れて倒されたヨシの根元にも、黄色い口ばしをのぞかせて動く小鳥がいます。

がくいばし かみ

二二、 丘山井橋の上にも群れ

「やれやれ、まずは順調なスタートだ。」
十五匹のコイの群れ発見で気をよくして、次の橋「岳井橋」を目指して歩を進めることにしました。

米屋さんの「オカリヨウ」を目標にしながら、川を眺めながら下がって行きます。どこから流れて来たのか、空き缶やプラスチック容器が散らばっています。勢いよく尾を振り続けるハクセキレイは、落ち着いた風情を演出してくれています。

ここでも、ガードレールを乗り越えて、川をのぞき込んでみました。岸沿いに建つ家の裏庭につながれた番犬が、早朝の「不審者」を見つけて、吠え立てています。

ここにも、河床強化ブロックが、ずっと続いています。深さが十センチ未満でしょう。コイの住める場ではなさそうです。

このブロックが、流れの障害物にもなり、流水が外気とふれあう場をつくり、酸欠になりがちな川の水質浄化も果たしているようでもあります。川音だけは、谷間を流れる小川のそれを感じさせてくれます。

砂地には、セグロセキレイが七、八羽と数が増えています。ブロックの下流を観察してみることができました。流れが、すつとゆるやかに変わった水深五十センチ程の所です。
やっぱいいました。

「一、二、三、……。」

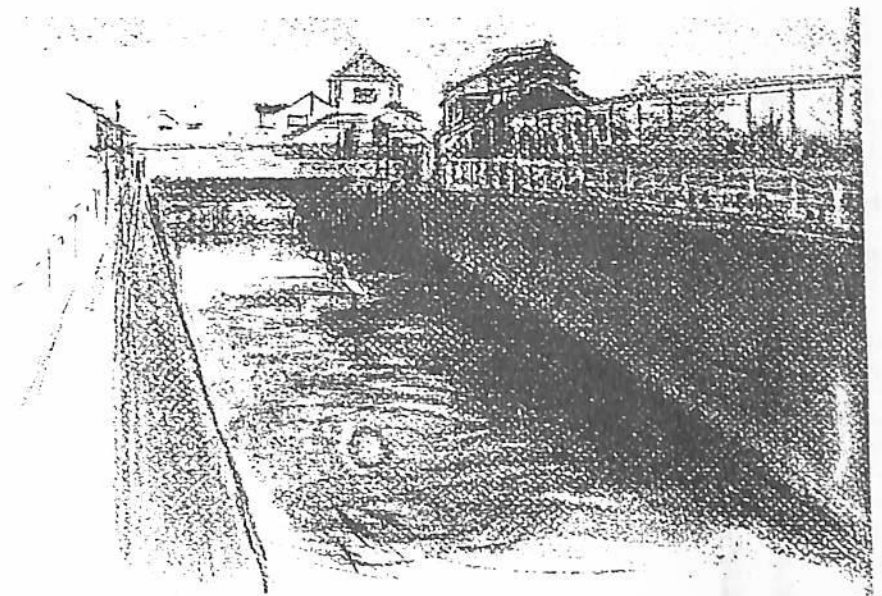
おもしろい程います。体長は、上よりやや大きくなって十六匹がすぐに数えられました。「みかわ生協」側の川べりには、マブナも勢いよく泳いでいます。

時折、白い横腹をくねらせながら、一斉にコイの群れが動きまです。五十センチ級のコイは、体重二キログラムはゆうにありそうです。生活排水にたつぷりと含まれている餌がそのものになっているのでしょうか。

砂川には、群れなすコイの食欲を十分にまかなってくれる餌があるはず。そして今、「荒食い」の秋でもあります。



奥山田池を源流にする砂川の水路



「上地八景絵はがき」の砂川（加納睦久氏画）

四、「二十年前にはウナギもいた」砂川

岳井橋から「オカリョウ」さんと「エレガンス川口」さんの間を抜けて、川向橋を通り更に向山橋までを歩いてみました。だんだんと、ヨシの繁茂が目立ち初めですが、カメ一匹の発見にとどまりました。マンホールからは、朝の洗いや洗濯排水が音をたてて流れ込んでいます。時計の針が八時に近づきました。

今日の探訪はここまでと、学校に向かいました。上地八区に加藤プレス工業所さん前まで来ると、ちょうど、ご主人の又之信さんがリフトの作業中でした。そこで、昨日行なったばかりの上地学区十周年事業推進バザー・上地市のお礼を申し上げます。

「そや、二十年前の砂川はきれいだった。」

昭和四十七年から始まった砂川改修工事の頃を思い出しながら、又之信さんのお話が始まりました。

魚は何でもおった。川上の方をせき止めて、かいどりをようやったし、東海金属工業の下の辺りでは石垣の穴にウナギ針を突っ込んで大ウナギを釣ったもんだ。ハエ・ナマズ・フナ・コイ・タナゴ・スナモグリと、まあ、何でも。深さは膝ぐらいまでで、幅は今の半分ぐらいかな。たまに深い所があるので、そこじゃあ、ばちやばち泳いだもんだよ。そやあ、きれいな小川だったよ。懐かしい話だね、今日は朝から。

「きれいな小川だったよ。」

又之信さんの言葉が、たまらなく胸にしみました。

八、上地郵便局

二年担任 深津 伸夫

交通機関が発達し、日本各地への時間的距離の短縮は驚くほどに進んでいます。また、電話一本で世界中の声を聞くことができ、テレビの普及により膨大な量の情報が飛びかっています。このような社会の中で生活している私たちにとって手紙の役割も時代と共に変化しているのではないのでしょうか。

二年生の社会の学習で手紙のことを取り扱うことになり、子どもたちに、「手紙を出したことがあるかな。」という質問をしたところ、ほとんどの子がこれまでも手紙を出したことがあるようでした。

まず、最初に葉書を書いてみることにしました。郵便局で売っている葉書をはじめ、絵はがき、切手の張ってない葉書そして中には画用紙を切って作った手製のものを使う子もいました。

相手の名前、住所、郵便番号を書き、自分のものも左すみに書きました。自分の家族に出すことにしたので郵便番号こそ困った子がいましたが、表はみんな自分で書くことができました。

「自分の夢を書こう。大きくなったら何になりたいとか、こんなことがしたいとか。」
というテーマで、自分の夢をのせることにしました。

十月二十三日、みんな一生懸命に書いた葉書を持ち上地郵便局へだしに行きました。

「上地郵便局はどこにあるか知っているかな。」
と聞く。

「私の家の近くだよ。」

「まどが鏡みたいになっているんだよ。」

「上地郵便局に手紙をだしに行ったことがあるよ。」
とさまざまな答えが返ってきました。子どもたちは学区
の郵便局なので、さすがによく知っていました。

上地郵便局に着くと、さっそくポストに手紙を入れる
ことにしました。切手がない子はお金を持って行って買
いました。普通の切手が四十一円、自分の好きな形の葉
書を作った子はちよつと高くて百二十円だそうです。

一人ひとり買いに行ったのに、とても親切に売って下
さいました。

「自分の番が来た時はどきどきしたけど、ちゃんと買
えたよ。」

初めて切手を買うのに少し緊張していたみたいです。

ポストもこの日は子どもたちの注目のまどでした。

自分の葉書を手にして、

「ぼくの家に出すんだけど、どっちの口に入れてばい
いの。」

となやんでいる子もいれば、スケッチをとりながら、

「先生、この『郵便』という字は何て読むの。」

と聞いてくる子もいました。

十時十分、ポストの時刻表通りに手紙を集めに来まし
た。集めに来た人は、深緑色の制服を着ていました。仕
事中にもかかわらず、十数分の間、ポストを何度もあ
けしめしてくださったり、子供たちの質問に答えてくだ
りさったりしました。子どもたちもポストの中の青やオ
レンジの袋をのぞき込み、興味深そうに見ていました。

きつこの日から子どもたちにとって上地郵便局は名
前を知っているとか、行ったことがあるというだけの存
在でなく、もっと身近なものになったと思います。

郵便局勉強は更に進み、岡崎の本局へも行ってきました。
大きな機械がいくつもあり、郵便物の仕分けをした
りスタンプを押したりしているのには驚きました。

これらの学習を終え、クラスの中では子ども郵便局を
開くための準備が進んでいます。上地郵便局の見学に始
まり、自分たちで子ども郵便局を聞くところまで学習を
進めて来て一通の手紙が届けられるまでに、どれだけの
人の手がかけられているかがわかりました。



「おじさんの説明はよくわかったよ。」



「次はぼくの番だ。じょうずに買えるかなあ。」

どんなに情報機関が発達しても、あの手紙をもらったときの嬉しさを忘れない限り、二年生の子もたちが大人になっても赤いポストはずっと口を開けて、みんなの心や夢をのせた手紙を送り続けることでしょう。

・子どもの質問と答の一例

「どんな気持ちで働いていますか。」

(質問 千原 あき)

「みんなが出してくれた大切な手紙が、ちゃんと書いてあるところに届くようにと思い、毎日、一生懸命働いています。」



「こっちに入れればいいんだよね。」

九、明日の上地農業を考える ―まちの中での農業―

五年担任 田中 鉄也

近年、宅地化が進み、人口増加の著しい上地学区にも、一箇所にかたまつて水田が見られます。今月の「ふるさとシリウス」では、その集合農地での稲作の様子を紹介し、さらに加藤廣務氏(上地町下屋敷)への取材を通じ、その現状と今後の展望まで話が及んでいます。

(一) まちのなかの農業

学区の土地利用の様子を航空写真で見ると、南北に縦断する国道を境に、学区の西部に水田がかたまっているのが一見してわかります。畑が点在しているのと比べ、整然とした水田地帯は、上地学区のひとつの特性であるとも言えます。「集合農地」と呼ばれているもので、七区総代の加藤氏の話によると、次のような経緯があったそうです。

今からおよそ二十年前、高度経済成長の勢いが日本全国に波及していた頃、この地にも開発の手がのびてきました。それは、岡崎と蒲郡を結ぶ旧一四八号線の交通難の解消(新国道の敷設)と土地造成を目的とする計画でした。

昭和五十年に着工にあつたものの、約百二十名の反対者が、「農地死守・下流への水害の危機」を唱えました。そこで、本来は認められないことであるが、上地地区の強い要望がかない、集



上地学区土地利用図

合農地を残し、水源を大谷池とすることで、決定の運びとなりました。

学区にはどれだけの人が農業に従事しているのか気になりました。学区の地域性として、商業的・生産的な活動よりも、むしろ他地域にある会社に就労する数が多いという実態があり、数が少ないことは予想の枠内としてありました。

そこで、上地小三年生の「お父さんの仕事調べ」をしました。大部分が会社員という回答で、農家は一軒もありませんでした。日曜日などに畑を耕したり、野菜の世話をしている人もいますが、会社や店の仕事を主としており、専業としていない人がいないことがわかりました。

このような学区の地域性や特性を考えるにつけ、集合農地ではどのように稲作が行われているのか、そして「まちのなかの農業」として生き続けてきたのかについて知りたくまりました。

(一) 集合農地での稲作（上地町下屋敷在住の加藤氏への取材から）

学区の西部に位置する集合農地は、全体では四町歩（四百アール）になります。ひとつの田にすると、ほとんどが一反（十アール）の面積を持ちます。

春の田起こしや苗植えから秋の収穫まで、上地地区ではどのように稲作が行われているかまとめてみました。

集合農地は三十軒ほどの人が土地を持っています。そのうち三軒の人が専業農家で、あとの二十軒以上のそうでない農家があります。広くなった水田は、米の収穫量を増やす一方で、機械化の手を打たないと、労働時間の増加につながり、農家の生活を圧迫します。しかしながら、大きな機械は七百万円以上もするので、一軒一軒の農家では購入できないのが現状です。なかには、運転席に冷房完備のものもあるそうです。

そこで、その二十軒以上の農家から請け負って、集合農地で稲作を営んでいるのが加藤氏（上地町下屋敷）です。請け負いの仕方にはいろいろあり、田植えは自分でやり、稲刈りを頼む場合があれば、田植えから収穫まで全部を頼む場合もあるようです。加藤氏自身も、請け負いとして従事している稲作とは別に、牧畜や会社の役員の仕事など手広く生計の道を立てています。また、上地の集合農地だけにとどまらず、県内の他地域の稲作も請け負っているそうです。



集合農地での農業を語る加藤廣務氏（上地町下屋敷在住）

実際に、トラクターやコンバインなどの大型機械の導入によって、生産効率が著しく向上しました。例にあげると、水田十アールを田起こしするのに、鍬を使った手作業で四時間以上のもので、大型のトラクターで二十分の作業になりました。加藤氏に以前の農作業の様子を尋ねました。

わたしが子どもの頃の農業

子どもの頃は、よく百姓の仕事を手伝われました。田植えの頃の忙しい時期には、学校が休みになりました。今では考えられないことです。でも、食べるということは、人間が生きていく上で一番のものになるので、それでよかったと思います。

秋になって、稲刈りが終わると、刈り取った後に残った稲の株を抜いたことを覚えています。どの仕事をやるにも今のような機械はありません。鍬や鎌などの道具を使っていました。田起こしなど労力を要す仕事には牛を使っていました。

その一方で、一台の機械の購入にかかる費用と維持費がかさむという問題もあります。加藤氏との話が、これからの上地の農業にまで及びました。

日本の食糧問題を考える『ザ・提言』

「輸入しているもののなかから、少しでも日本で作ったりするのいいと思います。それに、その地域にある農産物を作ったりするのいいと思います。昔より、農家の人が減って、工場などが多くなって、自給率が下がってしまっているの、なるべく工場ばかりでなく、農業も増やして、生産量を増やしていきたいです。あまり、外国の輸入にたよってばかりいると、何かあって、輸入できなくなってしまうことがあるので、やっぱり自給できるよ全部というわけには作れないものがあるのでできませんが、生産できるものはどんどん作って、輸入できなくても大丈夫な国にしていきたいと思っいます。それから、いくら外国の農産物が安いからといって、輸入を多くして、輸入を減らして、農家の人達がやっけていけなくなってしまうので、そのためにも日本の生産を増やして、輸入量を少なくしていけば、農家の人達も安心して農業をやっけていけると思います。だからやっぱり輸入を減らし、もっと農業で今まで輸入していたもの、少しでも日本で作って自給できるようにしていきたいと、わたしはこう思っています。」

5-4 小西美鈴

(三) これからの上地農業

わたしたちの食生活の変化にともなう米の消費量の減少と、品種改良や技術革新にともなう米の生産量の増加という相反する傾向によって、余剰米の増加という現象が起りました。政府が米価を定め、自国の生命線として稲作を保護する一方で、減反政策を進めてきました。

上地の集合農地にも、春から秋まで何も農作業のされていない休耕田があります。また、そのような田にアパートを建て、農地を手放す人もいます。少なくとも、集合農地でも毎年、いくつもの水田が宅地に変わっています。土地税制が変わると、この傾向に、さらに拍車がかかるようです。

また、米の自由化が大きな問題となっていますが、農家にとつて、稲作だけでは食べていけないというのが現状です。すると、後継者も見つからなくなります。つまり、米を作る人がいなくなるという事で、加藤氏の推測によると、十年後には上地地区では、農業が行われていないのではないかと話です。

農業はわたしたちの食糧を生産する基幹産業です。今の日本を考えると、豊かな工業力に裏打ちされた経済力を誇っているもの、何か片肺飛行のような脆い国家基盤を浮き彫りにしています。これを機に、わが国の農業についても考えてみたいものです。

十、ドミニーを訪ねて

ア、ドミニーの歴史

県道衣浦線沿いに大型スーパーマーケット「ドミニー上地店」があります。「ドミニー」は昭和六一年七月、世の中が車社会となってきたので、郊外型スーパーとして開店しました。「ドミニーフーズ」と「ユークイチ」が合併して出来ました。スーパーマーケットは以前、電車の駅や、町中の商店街など人のたくさん集まるところで開店していました。しかし、昭和五〇年ころから駐車場を広く確保出来るということで郊外型のスーパーが増えました。このように、時代に即応して「ドミニー上地店」が開店しました。

店舗の拡張工事として平成元年一月に衣料館が開店しました。はじめは、衣料品もいっしょにやりましたが、野菜、青果などが当初の



正面入り口付近

奥村 武文

予想より売り上げが上回るようになり、そのよ
うなものの売り場を拡張するための措置として
新しく衣料館を設けました。

イ、店内の様子

店内を回って見てきづくことは、中に地元の
店がはいっていることです。それは、化粧品、
漬物、総菜、寿司、魚、肉、クリーニング、銘
店街などの店です。これは、一つの店でいろい
ろな物が一度に買えるようにと考えたからです。
これらの地元の店が扱っている商品の中には、
「ドミール」でも扱っている商品が多くあります。
その理由として、同じ魚でも種類が違っていた
り、さしみでもブロックの物や短冊の物などい
ろいろ用意しておきたいからです。それぞれ自
分の店の特徴を出して商品を扱っています。ま
た店同士で競争をして少しでもいろいろな商品
を安く提供しようと考えられています。また、



店内の様子

地元と密着したスーパーマーケットの経営とい
うことからこれら多くの店が出店しています。
お客さんの数は、平日が約三〇〇〇人、休日
が約五〇〇〇人くらいです。開店当時は、本宿
から国道一号線を通して買いに来るお客さんも
多かったそうです。しかし、最近はいろいろな
所にスーパーができ、遠くから来るお客さんは
減り、近くの人が多いそうです。しかし、幸田
方面からくるお客さんは現在も多いそうです。
買いに来るお客さんの範囲がだんだん狭くなっ
て来ています。

ウ、店の工夫

店では商品がよく売れるようにいろいろな工
夫をしています。新聞などに入れる広告は、岡
崎市内全域、幸田方面の一部に配られるように
しています。枚数八万五〇〇〇部から九万部で
土曜日、日曜日のお客さんへの宣伝効果を考え



地元の鮮魚店

て金曜日や日曜日に入れることが多いです。

開店当時は安い商品を提供することを第一に考えたのですが、今では多くの商品をそろえることだとか、店内のきれいさ、お客さんに対するサービスなどに重点をおいています。

その中でも、お客さんへのサービスは今後ますます重要になってくるでしょう。開店当時は、レジの待ち時間が長いということでお客さんに大変迷惑をかけたということです。そこで、アメリカ製のベルトコンベアーに変え、短時間で出来るようにしてきました。商品も基本的にはどこの店でもあまり変わりませんが、その地域の行事や祭事に合ったものを並べるということも考えています。

またアメリカ製の大型カートを採用しお客さんが一度にたくさんのお買い物出来るようになっています。これも、開店当時の店の方針から生まれたものです。上地地区が新興住宅地という

こともあり、三〇才から四〇才くらいの夫婦で小学生と中学生の子供が二人いる家庭くらいのお客さんが一番多いという予想のもとに売り方を考えて来ました。一週間に一度くらい買い物に来るだろうということでパックも多く入ったジャンボパックを採用しました。

しかし、いまは、何回も買いに来る人が増えたり、量も少なくていいなど状況は変わって来ています。

買い物に車で来るお客さんが多いということで駐車場の確保が大切になります。開店当時は二〇〇台くらい駐車できましたがそれだけではたりなくなり、現在は約四〇〇台駐車できます。

エ、仕事の様子

営業時間は年間を通じて十時から一九時までとなっています。お盆、年末は忙しいので開店時間が早くなることもあります。定休日は水曜



レジのベルトコンベアー



広い駐車場

日ですが、祭日はお客さんが多いということで、営業しています。

季節によっても違いますが一日の中でお客さんが多いのは夕方四時から六時くらいです。当然店全体が忙しくなってます。主な仕事の内容は次のようです。

- ◆開店前 商品作り、商品出し、バック作業
- ◆開店中 売れたものの補充、商品の整理整頓
- ◆閉店後 後片付け、次の日の準備

一日中、たくさんのお仕事がありますがいつもお客さんが気持ち良く買い物ができるように心がけています。



店長の神谷さん

本年度の『ふるさとシリーズ』では、9月号に掲載した東海金属について学区の事業所紹介は今回が二回目です。

十一、大谷坂のたぬきへ創作童話V

吉良道で医療刑務所の前から、藤川へぬける所は、今でもちょっと寂しい田舎道です。その峠を大谷坂と呼んでいました。昔は、昼なお暗く、村人も気味悪がっていたようです。

これは、畔柳市太郎さんが、祖父の清吉さんから聞いた話をもとにして作りました。

清さんと留さんは、藤川のたてまえのお手伝いに行きました。久しぶりに、酒やごちそうをたらふくよばれました。二人とも、すっかりいい気持ちになって歌を歌いながら、月の夜道を、上地の方へ、千鳥足で帰ってきました。

「ごまんごくでえも (五万石でも)

おかぎさいさまはツト (岡崎さまは)

おしろしたまでえ、 (お城下まで)

ふねがつくヨツト (船が着く)

やっと大谷坂にさしかかりました。道はせまく、木がこんもりしげっているので、月の光りも、あまりとどきません。ここでは時々、いたずらたぬきが出るというわさがありました。

「おや、留さん、こんなところに、新しいおじぞうさんがあるぞ。」

「おかしいなあ。けさはなかったになあ、清さん。」



6年 柳瀬 志穂

「うん、いつのまに、こんな所にきたんだろう。」

「まあいいや。おまいりしていこう。」

持っていたみかんを二つあげて、手を合わせておがみました。

「どうぞ、今年も米がたくさんとれますように。」

「今年台風がきませんように。」

その時、おじそうさんはニツコリしたような気がしました。

「おや、いま、おじそうさんが笑ったぞう。」

「ばか言うな、そんなの気のせいだ。」

二人がそう言っておると、おじそうさんの目が、見る見るうちに、たまごぐらいに大きくなりました。

「ひゃあああ。」

「お、お、おばけたぬきだ。」

ぞうりをぬいで頭に乘せて、いちもくさんです。ためきにはばかされた時には、ぞうりを頭に乘せると安全だ、という言

い伝えがあったからです。

ほうほうのていで、上地までたどりつきました。ここまでくればもう大丈夫です。

「やれやれ、びっくりしたなあ。」

「どうもおかしいと思ったぞ。」

休んでいると、今度は、遠くから、カラコロ、カラコロけたの音が近づいてきました。

「おい滑さん、きれいな娘さんがくるぞ。」

「お、えらいべっぴんさんだぞ。留さん。」

「へへへ、もしもし娘さん。今ごろ、どこへ行きなされるね。」

娘さんは、鈴を鳴らすようないい声で答えました。

「はいはい、ちょっと馬頭（美合）まで参ります。」

「それでは、大谷坂を通るんだね。」

「はい、そうですよ。」

「それはやめたほうがいい。ためきにいたずらをされるから。」

私ら、今ここまで逃げてきたんだよ。

「そう、ありがと。ほほほ、へへへ。」

娘さんは、にたにた笑うと、みるまに大きな目玉になりました。

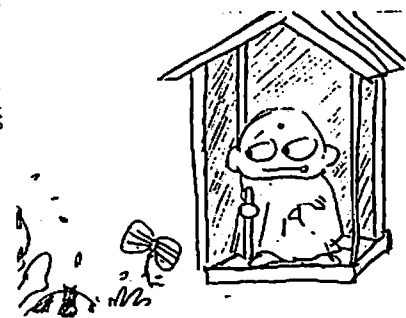
「ひゃあ、また出たあ。」

「た、た、助けてえ。」

二人は、ころがるように、家へ逃げ込んだということです。



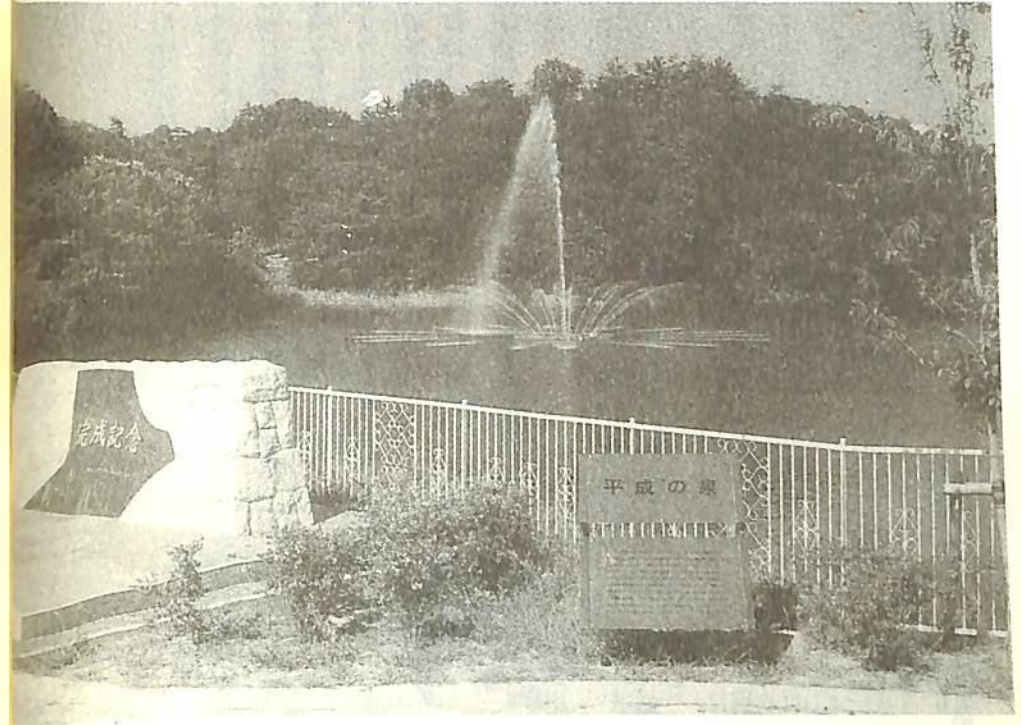
6年 梅田 陽子



6年 佐々木 夏子

二、校長通信

上地八景



8 大谷公園

全長120メートルの大谷橋が昭和60年に池を二分して建造された。公園北側の山中には、平安時代のあな窯跡も残っている。また、区画整理記念事業による「平成の泉」から吹き上げる噴水が新生上地の勢いを象徴している。

一、笑顔でスタート新学期

●その一、「握手大作戦」

緊張して入学した一年生も、すっかりなれました。顔つきもいつそう明るくなり、動きも、声も大きくなりました。朝、校門前の「おはよう」リレーも、元気よく言えるようになりました。

一年生の初めの勉強は「学校探険」です。校舎の中を探険して、施設や、学校で働く人の様子を知るのです。

そして、同時に「握手大作戦」ということもします。これは、何人かの先生に会って、自己紹介をし、先生の名前や仕事を質問します。そして、握手やサインをしてもらうのです。

どこに、どんな人がいて、何をしていたか、発見したことを「見つけカード」に書きます。

「素晴らしいです。」「どうぞ。何の用ですか。」「あのうー。ぼくは一年一くみのさとうよしまさです。あくしゅと、サインをおねがいます。」「

みんな、教室で何回も練習してきました。真剣な表情です。

「上手に言えたね。学校楽しいですか。」「うん。」「朝ごはん食べてきたかね。」「たべたよ。」「そうよかったね。」「さあ、手を出して。はい握手。」「

ここで、みんなにこっと笑います。どの手も柔らかく、そして温かく湿っています。

「あしたも元気よく学校へこようね。大きな声でおはようございますって言えるね。」「はい。」「という声が返ってきます。

「どうもありがとうございます。」「

この言葉は、ちゃんとと言える子もいますが、忘れてしまって、サインを見ながら、にこにこして帰っていく子もいます。

二、三人の子があわてて戻ってきました。

「えんちょうせんせいのおしごとはなんですか。あ、こうちょうせんせいだった。」
「だいなことを聞くこと忘れていたようです。」

「あのねえ、みんなの世話をすることだよ。わかるかな？」

「帰りがけに（たったそれだけか。）というつぶやきが聞こえ、思わずにが笑いをしてしまいました。」

●その二、「ここに写真コンクール」

毎年四月には学級写真を撮ります。一生残るので、一番いい顔をして撮りたいのが人情ですね。一番いい顔とは、もちろん、笑顔です。

そこで、今年は「学級写真コンクール」をすることにしました。一番笑顔のいいクラスに賞状を出すことにしました。

学級によっては、ぜひ賞状をもらいたいという意欲満々で、教室で「わっははは。」と笑う練習もしたようです。

「さあ撮るよ。」「セーのー、ラッキー。」「はい、パチリ。」というわけです。

結果、二十七学級、どのクラスもここにこして、さわやかな笑顔が写りました。一位入賞のクラスを紹介します。

一年一組、二年四組、三年四組、四年二組、五年五組、六年三組

五年で一位、五年五組の学級代表、野本真行君と大場采央さんにインタビューしました。

「おめでとう。入賞をいつ知りましたか。」

「朝、先生が言ってくれました。」

「みんなの反応はどうでしたか。」

「わー、ととっても喜びました。」

「男子で一番いい笑顔はだれですか。」

「熊谷君です。いつもおもしろい子です。」

「女子では。」

「匂坂明子さんです。とても明るい子です。」

「名前も明子ですね。」

「撮った時は何ともなかったけど、写真ができてきて見たら、笑って撮ってよかったなあと思いました。」（野本）

「まじめな顔で撮るより、笑っていた方が楽しいです。」（大場）

六年三組も、学級代表の佐伯康文君と成瀬頭代さんに聞きました。

「どうして撮ったか覚えてますか。」

「先生が、一たす一は？」と聞いて、みんなが「二イー。」と言いました。

「よく笑っているのはだれですか。」

「尾上浩一君、女子は丹下聡美さんです。」

「去年は何も一位がなくて、こんど初めて賞状がもらえるので、先生も、みんなもびっくりしています。」

「まじめもいいけど、笑った方がおもしろい。」（野本）

「一生残るから、笑って撮ってよかったと思います。」（成瀬）

二、本はともだち

「ともだち百人できるかな」という歌がありますが、本もすばらしい友だちです。

今、学校では、子供たちが、本と友だちになるよう、がんばっています。(小学校時代に読書の楽しみを知っておかないと大人になってからは、もう、手遅れです。)

まず、日記の中から、本と友だちになっているようすを、見てみましょう。

★きょう、『おねえちゃんてずるいよ』という本をよみました。いもうとが一年生、おねえちゃんが四年生です。トマトジュースがきらいなおねえちゃんは、いもうとにたくさんあげて、じぶんは、お母さんが見てないうちに、コップをぐるぐるまわしてよこすんだよ。だから、お母さんには、ばれない。いもうとのあやは、お母さんにいいつけても、お母さんは、しんじてくれない。うちのおねえちゃんは、そういうではなくてよかったとおもいます。(三の一 植村優子)



★私はゴールデンウィークは、とくにどこにも行きませんでした。自分で勉強したり、本を読んだりして過ごしました。私は本が大好きなので、特に大型連休になると、本が読みたくなります。宿題があると読めませんが、土曜日は宿題がないので、じっくり本が読めます。だから、市の図書館やブックランド(学校の図書室)などに行って、本を借ります。本を借りてきても、すぐ読んでしまって、次の本で、もつとちがう世界に入りたくなります。(六の四 斉藤照代)

本の中では、昔の国へ行くこともできるし、未来の国の探検もできます。また、外国へ旅をしたり、夢の国で生活したり、自由自在ですね。

今度は、五年四組の教室(学級通信)をのぞいてみましょう。

★『まんが日本史年表』を読んで。江戸時代のときの日本人は、蒸気機関車の模型や電信機を外国の人にプレゼントしてもらい、すこくおどろいていたので、むかしは、そんなものはなかったのだなあと考えた。(五の四 竹井 聖子)

★『太平記』を読んで。楠木正成という人は、すこく頭がいいなあと思いました。少ない兵の中でも、大軍を追いはらってしまっただから、千人に一人ぐらいしかないなと思った。(五の四 安田 晃)

★『ぼくは王様』を読んで。王様が城をぬけ出して、うそをしまえる宝石ばこをすててしまおうと、城や町の人の大うそをつくことがおもしろい。(五の四 大滝真司)

★『星の王子さま』を読んで。ぼつちゃんが「ひつじをかいて」とたのみ、三つかいて気にいらなかった。そして四つめはこのなかに入っているひつじが気に入ったから、すこくうれしかったような気がする。(五の四 大林香央里)

学校では月に二―三回、全校で「読書タイム」を実施しています。先生が読み聞かせをしたり、自由読書、本の紹介、感想画などいろいろ活動しています。

一年生では「おぼけの一日」「はらへこあおむし」「くまの子ウーフのかいすいよく」「十四ひきのピクニック」などの本

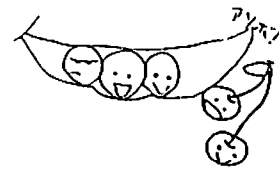
の読み聞かせをしました。あとから、おもしろかった場面を絵にかきました。感想を無理に聞くより、絵に描かせる方がいいようです。

以下、各学年でとりあげた本を紹介します。

- ・二年生「ガツーンとぶつかるはなし」「ろくべえまっつてよ」「スイミー」「おならばんざい」「かえるちゃんのおねしょ」「だましっこ」など
- ・三年生「くまの子ウーフ」「ぼくの地しん日記」「ねずみのすもう」など
- ・四年生「セロひきのゴージュ」「ライト兄弟」「さたおばさん」「山ねこおことわり」など
- ・五年生「ひばりの矢」「じゃめうまはなじろう」「よだかの屋」「ひろしまのピカ」など
- ・六年生「ああ無情」ほか。各自本を読んで感想やあらすじを紹介しあう。

終わりに、上地小学校の先生に、勧める本を聞きました。

- ・A先生「自分が子供の時に『まんが日本の歴史』を読んで、社会科が好きになりました。」
- ・B先生「弱虫を勇気づける『十五少年漂流記』こんな冒険旅行をぜひやってみたい。」
- ・C先生「どの学年の子にも感動を与えて、思いやりの心が育つ本『さっちゃんのみまほうの手』」
- ・D先生「寺村輝夫の王様シリーズがおもしろい。王様の子供つばさと、ユーモア性が好き。特に『王様ばんざい』がいい。」
- ・F先生「『アルプスの少女ハイジ』いつの時代でも、このようにけなげなハイジはとてもいい。」



岡 田 3 の 愛 4 生

二、委員部長さんに聞く — はりきる委員会活動 —

今日は、児童会の委員会活動について紹介します。

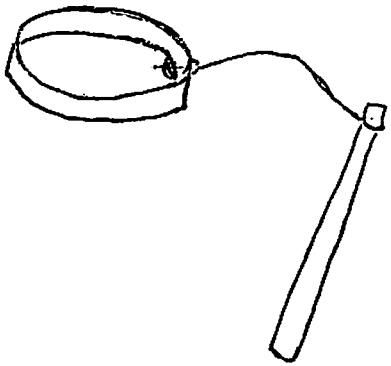
まず、六年生の生活記録を紹介しましょう。

「私は放送委員会を第一希望に入れましたが、何かとあれこれで、地味な美化委員会に決まりました。私は美化はあまりおもしろそうじゃない、地味という理由で第八希望でした。が、今は美化委員会のしごとがとても楽しいです。とてもとても楽しいです。特にもうすぐ、私の出したパズルでの「そうじコンクール」がおこなわれるので、とてもうれしいし、月曜日が待ち遠しい気分です。あまり気の進まないことでも、やってみれば楽しいことも大ありですね。だから、これからいろいろなことにちょう戦し責任をもって何でも成しとげたいと思います。(六の四古沢寛子)

与えられた仕事に、まじめに取り組んでいこうとする気持ちで尊いと思います。

六月十五日(月)は「雨雨集會」でした。これはなかよし集會委員会によって企画しました。題名も内容も子供らしい発想です。その中で、「紙のけん玉」をつくって遊ぼう、というアイデアが出されました。委員の子が、授業後残って準備をします。画用紙を切って輪をつくります。これがなんと九六〇(児童数)も。当日は一人ひとり持ってきた割り箸に、糸をつけてできあがりです。

(図参照)一年生から六年生まで、「きゅきゅきゅ」と大喜びです。



渡部 俊介

「体を使ってやる集会が少なかったので、今まで以上に一年生も喜んでくれてよかった。」
と委員の子たちも満足顔です。

委員長の渡部俊介君(六の一)に聞きました。

「委員会活動をしていて、楽しいことや、困ったりすることは？」

「集会が成功して、みんなが喜んでくれるとき、困ることは、時々さぼる人がいる。でも、次の日、あやまるけど。」

以下各委員長さんにも聞いてみました。(敬称略)

・ドレミファ集会委員長(六の四 堂園 秀樹)

「自分のアイデアが集会に使われることがうれしい。集会の時など、ずっと笑っていたり、入退場が遅いのが困ります。

・美化委員長(六の二 富永 健太)

「そうじ道具入れの中が、きちんとせいとんされているとうれしい。先生が話している途中、しゃべっている人がいるのが困ります。」

・安全委員長(六の一 井口亜希子)

「名札をつけよう運動を始め、みんながすぐ実行してくれるとうれしいです。あぶないことをしていて、注意してもなかなか聞いてくれないのが困ります。

・赤十字委員長(六の三 中塚 健史)

「ベルマーク集めをすると、いろいろな品物が買えてうれしいです。でも、ベルマークで買ったもの、たとえばホッピングはすぐこわれてしまいます。どうすれば大切に使うてくれるでしょうか。」

・新聞委員長(六の二 柳瀬 志穂)

「新聞をみんなが読んでくれているのを見るとときがうれしいです。新聞にのせることを決めるとき、なかなかきまらないので困ることがあります。」

・図書委員長(六の一 夏目 俊彦)

「いろいろ本のこと、よく分かるのがいいです。本がくしゃくしゃになったり、カードにきちんと書いてないのが困ります。」

・放送委員長(六の三 尾上 浩二)

「自分たちで放送を流すことがとても楽しい。でも、もっとよく放送を聞いてほしいです。」

・緑化委員長(六の四 杉浦 詩帆)

「自分たちが水をやった花が、きれいに咲いたときうれしいです。でも、夏はすぐかわくので水やりがたいへんです。」

・保健委員長(六の一 上坂 亜希子)

「あまり自立したところで仕事ができることがいい。せつけんや消毒液を遊びで使ってしまう子がいるので困ります。

・運動委員長(六の二 大滝 幸司)

「大会などひらいて、成功したときうれしい。使った竹馬などが、ばらばらになっているので困ります。」

・給食委員長(六の二 森下 康志)

「先生やみんなとしゃべれるのがいい。委員会するとき、なかなか静かにしてくれないのが困ります。」

・VTR委員会(六の一 住田 朋久)

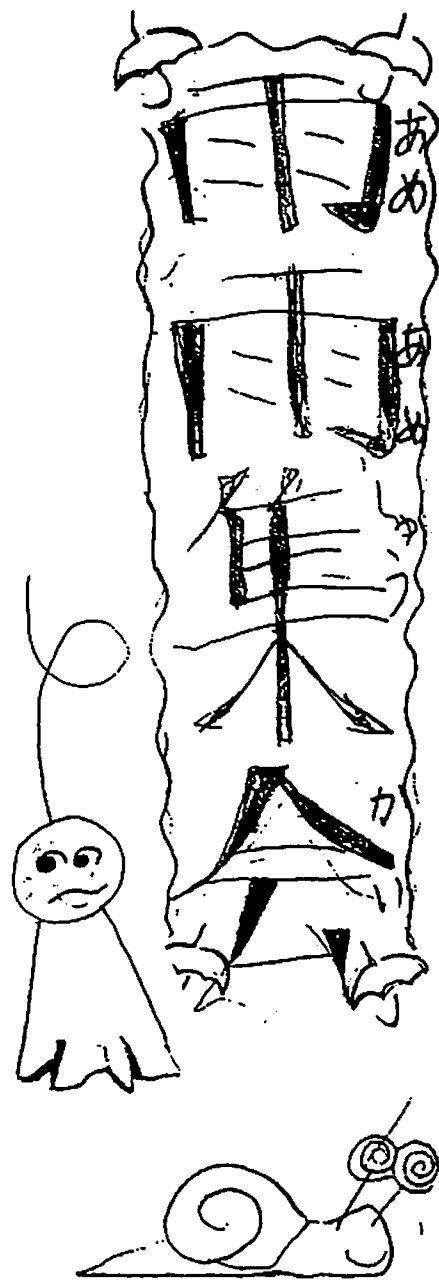
「ビデオをつくる時、いろいろな機械のことが覚えられることがいい。でも、機械を使おうと思っても、こわれて使え

なかつたりすると困ります。

・広報委員長(六の一 松田 剛幸)

「イラストコンクールなどで、いろいろな絵が見られるのでいいです。掲示物が取れたり、傷つけられたりしてあるのが、代表委員会(大滝 幸司)

」委員会で選手激励会や上地っ子文化祭の相談をしています。うまく話すことが苦手だったけど、やっているうちに、少しずつ慣れてきてよかったです。運動委員会とソフト部と代表委員会とやっていて忙しいけど、困ることはありません。」



雨雨集会のチラシより

四、みんな大好きクラブの時間

七月四日(水)のクラブ活動をご紹介します。

サンクガーデンでは、野外レククラブ(部長六の四堀岡健太)が「火舞い」の練習をしていました。「きょうは本物の火をつけてやるんだよ。」と興奮気味です。「ドキドキしたけど、すんだらスッキリしたよ。やっぱり火をつけてやると楽しい。」八月二十四日の夏祭りに出演がきまって、練習にも一段と熱が入ります。

普通クラブ(部長六の四福井巳容)を見ました。一人ひとり、先生に直してもらって、じっくりと練習しています。「みんなちゃんとやるので、別に困ることはありません。いま防火展の作品を書いています。」床に正座して、大作を書いている子もいます。

バチリバチリ、将棋のコマの快い音。教室のあちこちに陣取って、楽しそうにやっているのは将棋クラブ(部長六の四小川隆史)です。

「リーグ戦をやるのが楽しい。みんながもっと強くなってほしい。」とは部長さんの意見です。



5の1 名兒那良美

(原画 平沢多映子)

編み物クラブ（部長六の四中垣まどか）は、が女子ばかり。「ボシエットやクッションなど作ります。毛糸で編むことが楽しい。」指先を動かした分だけ、でき上がっていくのが目に見えるので、張り合いがありますね。

体育館では卓球クラブ（部長六の四吉本玄）が、名人戦をやっています。この日の名人は、六年尾上浩一君。「総当たり戦を四年から六年まで、みんなやってみたい。」と部長さんよりはりきっています。

バトミントンクラブ（部長六の一平野扶美）も体育館です。「今は打ち合いの練習です。みんながもつとうまくなって、一対一で試合をやってみたい。」小田先生や部員の熱意で、バトミントン部になる可能性もあります。

今度は手芸クラブ（部長六の四田上峰子）です。「フェルトを使って人形やブックカバーなどを作っています。みんなやるのでとても楽しいです。いろいろ役に立つものを作りたい。」いろいろな作り方をおぼえるので、これからが楽しみです。

紙ひもクラブ（部長六の三本田智久）は、はさみやカッターナイフで手先の仕事です。船、飛行機など自分の好きなものを作ります。中にはヘリコプターを工夫して作る子もいます。「細かい作業がうまくできないことがあります。それができた時が一番楽しい。」という部長さんの感想です。紙ひもとは思えない、味のある模様ができます。

クラフトクラブ（部長六の二深水祐介）は図工室で、ステンドグラスの小物入れ製作中でした。先回までは模刻飛行機を作った、飛ばしていました。工作の好きな子には、最も待ち遠しい時間のようです。

科学クラブ（部長六の四畔柳佳代）は理科室です。にぎやかな音が聞こえます。ストローを切って、笛を作り、ピーピー鳴らしています。切り方を考えては、音を変える工夫するのが、科学クラブらしいところです。

社会科クラブ（部長六の四鈴木由香里）は視聴覚室です。この日は四台のテレビで、地域教材の自作ビデオ「三河仏壇」を見て感想を話し合っていました。授業に直結しているクラブです。「地名あてクイズがとくに楽しい。」そうです。

レクリエーションクラブ（部長五の三星野友作）は先回はカラオケ大会、きょうはプールで水中ボール遊びで、大はしやぎで

す。「プールでの遊びが今までで一番楽しい。」そうです。

ソフトクラブ（部長六の一阿部田直樹）は男子に人気のあるクラブです。「外で思いっきりソフトをして遊ぶのが楽しい。みんなの集まりが遅いと困るけど。」部長さんは責任がありますから、集まり方も気にしますね。

ホームクラブ（部長六の一塚本晶子）は女子のクラブです。「ビーズで小物作り、フェルトでふでいれを作りました。ペーパーフラワーが一番楽しい。料理にも挑戦してみたいです。」とやる気まんまんです。

スケッチクラブ（部長六の一宮崎純）「クロッキーや風景、動物などかいています。大きい紙に思いっきりかきたい。」教室に、ゆったりと温かい空気が流れます。未来のピカソを夢見ているのでしょうか。

読書クラブ（部長六の一藪本真吾）は広い図書室です。本好きな子は大ぜいいます。本に囲まれて、静かに読んでいます。「いろいろな好きな本がいっぱいあって、たくさん読めるからいい。読書カードも書きます。」

園芸クラブ（部長六の四加藤恵一）は花壇で活動します。「水まき、草取りなどしています。植物を育てることは楽しいです。「これこそ好きな子でないと続きませんね。育てる楽しみや苦勞は、貴重な、すばらしい体験となります。」

五、結果はあとからついてくる

スポーツ大会を前にして、選手の子に言うことは、このように決まっています。

「どのチームよりも、大きな声で挨拶をしよう」「どのチームよりも、いいマナーで行動しよう」「相手のチームよりも早く並ぼう」

上地小の子供たちは、今年も精いっぱい、自分の力を出し切って活躍してくれました。力いっぱいやれば、結果はあとからついてくるものです。結果は次の通りです。

・バレーボール(九人制) 男子優勝/女子準優勝 バレー県、東海大会(六人制) 女子優勝/男子準優勝・バスケット準優勝・サッカー三位・水泳男子総合五位・ソフトボール ベスト8

競技を見た、よその人が「上地の子は表情が明るいねえ」「声が大きい。活気がある」と感想をもらっていました。本当にそうだと思います。

特別に選ばれた子供ではありません。特別に体の大きい子供でもありません。ごく普通の子が、汗と涙の練習を乗り越えて、こういう成果をとってくれたのです。本人の努力はもちろんですが、指導者の方針にご協力くださった保護者の方のお陰でもあります。厚くお礼申し上げます。

ところで、このころは学校でも、家庭でも「子供を鍛える」ということがむつかしくなりました。「辛抱する」「歯を食いしばってもやり遂げる」「みんなのために、自分のことを忘れる」ということを知らない、長い人生で挫折することがあります。こういう強い心を養う機会が、少ないのですが、スポーツならできます。勝ち負けより、ここで強い心身が育ってく

ることを願っております。

一方、室内でも静かな苦闘が続いていました。それは、熱さとの戦い、汗だくの根気くらべの「統計グラフづくり」です。テーマをきめる、内容を検討する、資料を集める、アンケート項目を考える、アンケートをとる、集計する、まとめる、下絵をかく、色をつける、拡大する、規定の用紙にかく、最後にいよいよ色ぬり。これがまた、ミリの単位のグラフで神経を使うこと甚だしいのです。こうしてやっとでき上がりという順序です。

このあいだ、いくつかの壁があります。先生や保護者に何度も相談します。やりなおしをしたり失敗したりで、べそをかいたり、励まされたり、途中で投げ出したくなりますが、それをやっと我慢してやり遂げます。これも「市長賞」「教育委員会賞」「算数数学部会賞」そして『学校賞』をいただき、さらに十七点も入賞しました。

四年連続出場のパレーボール全国大会は、「よくここまでやってくれた」という一語につきます。言葉では言い表せないプレッシャーを見事にはねのけて、上地っ子の底力を発揮して、愛知県代表の使命を果たしてくれました。目には見えませんが「上地」というふるさと意識を、一段と高めてくれたことも忘れることはできません。全校の子に「やればできる」という勇氣と自信を与えてくれました。物心両面から、絶大なご援助を頂きました方々に、深く感謝しております。

総代会、社会教育委員会、PTAが一体となって第二回の親子夏祭りが行われました。「手作り」の、有意義な夏祭りでした。今年には子供たちも、鼓笛パトーンパレードや火舞いなどに大勢出演して、大盛況のうちに終わりました。夏の夕べ、親子、家族で楽しんだ思い出は、いつまでも消えることはないと思います。この行事も大勢の方々から絶大なご協力をいただき、重ねて厚くお礼申し上げます。

六、生命の尊さを知った授業

九月十九日、五年五組（担任小田英宣先生）で、保健の研究授業を行いましたので、ご紹介します。内容は、「からだの発育」で、性教育の基礎となる大事なところでした。子供たちの素直でまじめな学習ぶりを知っていただきたいと思います。

学習の進めかたは次のようでした。

一、自分が産まれた時の様子や苦勞話などを発表する。（前の時間までに「自分が生まれたとき」という題で作文ができています。）

二、赤ちゃんになる卵（受精卵）の大きさを予想して、図にかく。

三、おなかの中で、赤ちゃんがどのように大きくなっていくのか考えて発表する。

四、ビデオ「受精卵から出産まで」を視聴する。

五、「お母さんの話」（録音）を聞く。

六、不思議に思ったことや、驚いたことを書く。

体の仕組みの理解だけでは、片手落ちになってしまいます。二両親の子供が産まれるときの、喜び、期待、苦勞などを知り、感動的な授業になりました。

次の、お母さんの話は、事前に家庭で録音してもらいました。

・お母さんのおなかにいる時から、あなたは女の子とわかっていました。だから、産まれる前から、あなたの名前は、Ｙときめていました。末広がり、大きな大きな枝となって、しっかり生きてほしいからです。小さな体なのに、

大きな声で泣いたとき、思わず「神様、有難うございました。」と、手を合わせました。三番目だけ、あなたの顔、あなたの体、あなたの手、みな覚えていきます。三月一日、窓の外は雪が降っていて寒い日だったけど、お母さんの心は暖かかったよ。もみじのような手で、あやとりをしたり、折り紙を折ったり、一生懸命やっていたあなたの目は輝いていたよ。これからも元気で、やさしい女性に成長するように、家族で祈っています。

授業を受けた子供の感想文を、抜き書きしてみます。

●私は、今日の授業を受けたとき、どういふことをやるのかなあ、と思っていました。ただ、赤ちゃんのことだけはわかっていました。私は初め、ドキドキしました。一年生も三年生も（研究授業を）やったので、がんばろうと思いました。先生がカセットテープを流すとき、だれかなあと思っていたら、（私の）お母さんでした。私は、思わずびっくりしてしまいました。ほんとうにお母さんの気持ちかわかって、少し泣いてしまいました。お母さん、私を赤ちゃんから育ててくれて、ありがとう。（I・Y）

●わずか十か月で母のおなか、まほうの部屋で五十七センチもおおきくなって、今までぶじに育ってきました。最初、わたしは赤ちゃんを産む時、すごく痛いよと母に聞かされて、大きくなって赤ちゃんは産みたくないと思ってきたけど、この授業を受けたら、自分で一つの生命を育てるなんてすごいなあ、と思いました。自分が女でよかったとも思うようになりました。これから大きくなって、赤ちゃんを産む時があっても、このことは忘れなれないと思います。そして、母や父たちが、私をかわいがってくれたのと同じくらい、それ以上に、自分の赤ちゃんが産まれたとき、かわいがってあげようと思います。（B・S）

●ここまで大きくなったのは、お母さんのおなかの中で、まほうをかけられたみたいに感じました。だからぼくは、お母さんにあらためて感謝しています。こんなにかわいがる人もいれば、赤ちゃんをすててしまう人もいます。ぼくはそ

う人たちのことが信じられません。もっと人の命をだいじにしてほしいと思います。(N・M)

●ぼくはこの授業を受けて、生命の誕生はとてもすばらしく、そして少しふしぎだ、と思った。産まれる前は、お母さんのおなかの中で、ほんの0.5ミリほどの卵から、今は約百四十七センチもある子が産まれてきたなんて、本当にすばらしい。お母さんたちの勇氣、愛情には、ぼくが何百人集まっても勝てやしない。すこいなあ。だってひとつの生命を産みだすんだもん。お母さん、どう表現したらいいかわからないけど大感謝！ありがとう。ほんとうにどうもありがとう。

(K・H)

どの子も生命の神秘と尊さに驚き、母への感謝の気持ちを強くしていることが分かります。こういう学習をしておれば、難しい第二反抗期もうまく乗り越え、立派に成長してくれることと思います。



七、本を読む楽しみを

「秋の夕日に 照る山もみじ・・・」の歌が、あちこちの教室から聞こえてきます。

昔から言われるように、秋は読書にいい季節です。六月には「あじさい読書運動」を実施して、ほんの好きな子供がたくさんふえました。

秋には「もみじ読書運動」によって、もっともっと好きな子供を増やしたいと思います。

ところで、体の栄養をとることを忘れる人はありませんが、心の栄養をとることをわすれることがあります。心の栄養のとりかたは、いろいろありますが、読書が最も良い方法であることは、よくご承知のことと思います。

そこで、学校では、十月三十一日から十一月二十六日までを「もみじ読書運動」の期間として、目標を決めて、本を読むようにします。

・一、二年 二十冊以上

・三、四年 十冊以上

・五、六年 千ページ以上

多いなあ、と思われるかも知れませんが、一、二年生の本は、絵が多く、字も大きいので、五分か十分もあれば、一冊呼んでしまいます。また、厚い本でも薄い本でも一冊は一冊ですから、どの学年も冊数はそんなに負担にならないでしょう。本によく「〇年生向き」と書いてありますが、これにあまりこだわることはありません。

その子の興味、経験に応じて、この枠は無視していいのです。その子の個性で、例えば、六年生が三年生の本を読んだっていいのです。

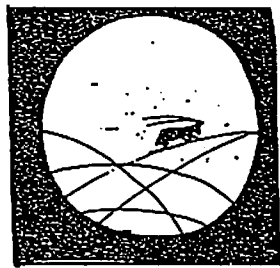
「テレビなら大好きですが、本を読むことが嫌いで・・・。」とか「マンガばかり読んでいて困ります。」とかよく耳にします。これは、まだ本を読む楽しみ、本のおもしろさがわかっていないからです。読書の楽しさ、おもしろさを知らせるために、このような読書運動を進めるのです。

もうひとつ、「親子ふれあい読書」(家庭読書)のご協力をお願いします。カードを用意しますので、うちの人のいっしょに読んだら、ひとつ色をぬります。都合で読めない時は、家で二十分以上読んでも色がぬれます。親子話し合い、ふれあいよ

い思い出となりますのでぜひ、実行してくださいさるようお願いします。

いずれにしても、本を好きにさせるには、環境が大事です。家の人が読めば、子供は自然に本好きになります。(スポーツや趣味の例でもよくわかります。)また、「興味と必要」があれば、読むなどについても読むものです。

小中学校時代に、読書の楽しみを知っておけば一生読む習慣がつくのです。



八、学区・学校創立十周年記念事業によせて

十周年事業について、私は子供たちに、次のように話します。

「家庭で子供の誕生祝いをします。両親や家族の願いがこめられ、子供はその期待にこたえようと思います。そして、今までのあゆみを振り返り、これからの希望を話しあうのです。学区・学校の誕生祝いが十周年の事業です。学区の人が、みんなでお祝いをするおめでたい行事です。これは毎年やることはできないので、十年に一回やります。」

おかげで、十周年記念事業も、順調に進んできております。「記念誌」「郷土読本」の編集も始まっています。「ふれあい牧場」も、りっぱに改装されつつあります。

学校正門横には、記念像の土台もできましたので、このことを少し説明します。

記念像などは、どこか学区のまん中に作ったほうがよいという意見もあります。しかし、「小学校を学区の中心にしたい」「公園などと、傷つけられたりいたずらされたりする心配もあるし管理もむづかしい」「小学校以外に、適当な場所もない」という理由で、委員のかたのご賛同を得て、学校に設置させていただくことになりました。

記念像は、十周年記念にふさわしい条件として、次のようなことが考えられます。

- ・ 発展する郷土土地、住みよい町土地を象徴するもの
- ・ 子供、学区民の心のよりどころとなるもの
- ・ どこに出しても恥ずかしくないもの
- ・ 押し付けがましくなく、親しみ易くて芸術性の高いもの

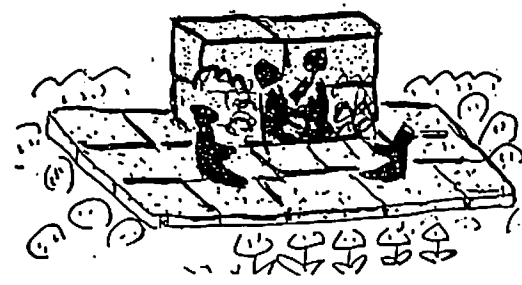
具体的には実行委員長の成瀬司氏、記念施設部長鈴木行夫氏や部員の方を中心に検討していただき、岡崎の特産みかけ石で、定評と実績のある郷土の彫刻家、鈴木政夫先生にお願いすることになりました。鈴木先生は、学区を歩かれ、上地の風土を肌で感じられ、半年間構想を練って、作品（レリーフと人物像）を『ふるさと上地』と命名、鋭意制作中であります。

☆鈴木政夫先生の最近の動静を紹介します。（十月四日、「岩手日報」より転載）

「心の師、光太郎ゆかりの花巻訪問／四十数年ぶり報恩の像 愛知の鈴木政夫さん」

高村光太郎を生涯の師と仰ぐ岡崎市在住の彫刻家鈴木政夫さん（七十五）が、十月八日、光太郎が戦後疎開していた花巻市を訪れ、自作の石彫を寄贈した。鈴木さんは、石の彫刻家としては日本の第一人者で、全国各地の公園に作品が展示されている。花巻へは弟子を志願して疎開先を訪ねて以来、四十数年ぶりの訪問。「光太郎に励まされ、光太郎を思い続けてきた私にとっては花巻は私の彫刻の出発点」と長年の思いがけない、感激の面持ちだった。

（鈴木政夫先生は、関西阪急ニュータウンの環境造形を担当。太陽の城、城北中学校、葵中学校、竜美丘小学校、緑丘小学校などに記念像が設置されています。）



九、かみかみ運動・けがの功名

▼「かみかみ運動」

食事のとき「よくかんでたべましょう。」ということばは、だれでも知っています。よくかむと、いいことがたくさんあります。

- ・歯が丈夫になる。
- ・歯並びがよくなる。
- ・消化を助ける。
- ・あごが適度に発達する。
- ・血液の循環がよくなる。
- ・骨が丈夫になる。
- ・食べ過ぎしなくなる。

ところが、このごろの食事は、あまりかまなくてもいいようになってきています。成長の止まった大人ならまだしも、育ち盛りの子供にとって、これは大問題です。

学校では、給食に「干しいわし」とか、「干しいか」などが時々出て、かみかみ運動を奨励しています。しかし、これだけでは、とても追い付きません。家庭の方でも、めんどうがらずに、家中でかみかみ運動をしていただきたいと思えます。

ところで、最近「若い人のかむ力が衰えたから、近眼がふえた。」という説を聞きました。よくかむと、目の横の筋肉を刺激して、視神経が発達する。近視は、テレビの見過ぎや本の読み過ぎなどではなくて、「よくかまないから視神経の発達が悪い」というのです。

それはともかく、あごの発達が悪いと、頭の重心が不安定になります。大人で「頭の重さは体重の七％」といえます。子供では体重の一〇％ぐらいでしょうか。そうすると、四〇キログラムの子供は、四キログラムの頭を支えて、走ったり飛んだり



しているわけです。それにあこの発達が遅れ、頭の重心が不安定になっていると、よく転びます。その上、骨が弱くなっているのですから、骨折をしやすいうことになります。

学校のけがは、打撲、擦り傷、切り傷、捻挫、骨折といろいろあります。中でも骨がもろくなっていることが、最近著しい傾向です。安全指導に十分気を付けておりますが、年々ふえています。ご家庭でも、あこや骨がもつと丈夫になるよう、ご留意くださるようお願いいたします。

▼けがの功名

「あんたが、ぼやぼやしているから、けがをしたんだよ。」

「この忙しいのに、お父さんに叱られるよ。」

これでは子供は救われません。小さいときは、話をよく聞き、少しの時間でも一しよに遊び、本を読んでやったりします。少し大きくなると、お母さんは、下の子に手がかかる、お勤めもある、家事も忙しいといったこともあつて、つい放任されることもあるようです。

子供が、何かを親に訴えようとしても、じっくり話しかける暇などありません。時には甘えたくても、そんな隙がないのでしよう。こんなとき、子供の生活は、だんだんおかしくなります。いつのまにか、親と子の「こころ」が離れて行きます。

何年か前のことです。A君が骨折をしました。

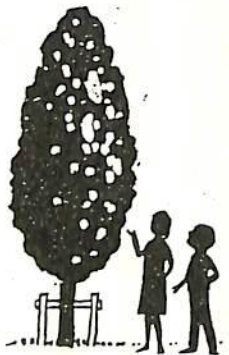
お母さんは、こんな時ばかりは、忙しいなど言っておれません。入院したので、A君に毎日ご飯を食べさせる。体を拭く。着替えを手伝う。一しよにゲームをする。こういうことを通して、忘れかけていた「親子の肌の触れ合い」や「対話」ができました。そして、一番だいたい「お母さんと子供が、目を見て話ができる」ようになりました。

骨折をきっかけに、よい親子の関係はよみがえりました。A君は、これを機会に、表情が明るくなり、子供らしさをとりも

どしました。教室でも落ち着いて勉強できるようになったのです。

けがをしたり病気になることは、決して望ましいことではありませんが、今まで「見えなかったもの」が見えてくることもあります。心が次第で、マイナスをプラスにすることができま

まきに「けがの功名」です。



十一、学芸会を最終へ



今年の学芸会で、一年生が、生活音楽劇「おいも・おいも・おいもかんげいかい」を、カいっばい上演し、大好評でした。

このサツマイモを作った農園は、学校の南門前にありますが、成瀬俊雄さん（上地町宝六）の畑です。成瀬さんのご厚意で、カいっばい、楽しい発表もできました。長い間、快くお貸し下さって、どうも有難うございました。

四年三組が「絵からぬけたしたトラとりゆう」を、創作舞踊で発表しました。虎の絵の掛軸は、早川博さん（上地町下屋敷）のお宅にあります。子供たちは、早川さんを訪問して先祖伝来の家宝、虎の絵を見せてもらい、お話を聞き、交流を深めながら、創作舞踊を作りあげました。四年生とは思えないレベルの高い表現に、みんな驚きました。

四年四組の「あほろくの川だいい」のクライマックスに、太鼓が鳴ります。この太鼓の打ち方は、成瀬忠さん（上地六丁目）が、わざわざ日曜日に来て、手を取って教えてくださいました。お陰で、当日は、すっかり腰の入った構えで、迫力満点の音色が、会場いっばいに響きわたり、観客の胸を打ちました。

早川さんも、成瀬さんも、子供たちの演技を見て、非常に感激してみえました。

これなど、ひとつの例ですが、事あるたびに、地域の方々にいろいろ親切に教えて頂いて、感謝しています。改めて、お礼申し上げます。

家庭科室では、PTA役員さんによるバザーが大盛況でした。前の日の、夕方遅くまで準備していただき、その甲斐あって、大入り満員でした。鈴木豊会長さん初め、宇井均副会長さん、井口清次書記さんなど、男の役員さんまでが、エプロンを付け

て、かいがいしく働いておられる姿を見て、感銘を受けました。率先して、みんなのために働いて下さってこういうことが学芸会を一段と盛り立てていたのです。家族で温かいお汁粉を飲みながら、談笑されるのを見て、すばらしい機会ができて、本当によかった、と思いました。

子供たちが、入口のスリッパや下足をそろえておってくれました。寒い風にあたる所です。舞台係、放送係、照明係、会場係、その他多くの係の子供が、このような「縁の下の力持ち」に徹して、自主的によく働いて子供たちが学芸会を成功させてくれました。

あさひ写真屋さんが「お客さんが、いつも多いですねえ。」と感心していましたが、子供たちの熱演について引き込まれて、大勢の方が笑ったり涙ぐんだりした一日でした。

学校では、読書にも力を入れております。その成果が認められて、今度「学校図書館奨励賞」（岡崎市内で一校）を頂きました。読書の影響もあって、次のような、子供たちの好きな本から脚色された劇がたくさんありました。

「どろぼうがっこう」（かこさとし）、「あほろくの川だいい」（岸武雄）、「二十四の瞳」（壺井栄）、「走れメロス」（太宰治）など定評ある名作です。そのほか、民話、童話、歴史物などがありますが、この機会に、もう一度原作を読んでほしいと思います。きっと子供たちの心を、いっそう豊かに育ててくれるでしょう。

十一、クラス編成を改善します

本校では、現在クラス編成は次のようになっていきます。

- ・一年生は新しいクラス。
- ・二年生もクラス替えをする。
- ・三年でクラス替え、三、四年は同じクラス。
- ・五年でクラス替え、六年は同じクラス。

このように、六年間で四回、クラス替えをするわけですが、これを検討して改善したいと思えます。上地小学校の子供の実態、保護者の方の意見、教師の考え、そして時代の動きなどからみて、子供の健全な成長のため、よりよい方法にしたいという願いです。

結論から言いますと、これから「全学年、毎年クラス替えをする。」ということですが、主な理由は五つあります。

一、子供たちは、六年間にできるだけ多くの友達を作るのが望ましい。できるだけ多くの教師に接して学んだほうが、偏りのない成長が期待できる。

最近、児童数が千人近くなり、一学年の学級数が五クラスにもふえてきて、同じ学年でも知らない教師、子供がいる。したがって、人間関係がうまくいかず、トラブルが起き易い。

二、これからの時代は、個性化がますます進み、教師の方針になじめない子供も増えることが予想される。そういう子供が二年間一緒にいるということは、考えなくてはならない。

三、毎年クラスも替わり、担任も替わるほうが、新鮮な気持ちで学習できる。一年勝負で学級づくりをするほうが望ましく「来年こそは」ということは、あまり期待できない。

四、二年間固定すると、学級差が大きくなり過ぎ、子供、保護者間に好ましくない競争心が生まれることがある。

五、すでに、多くの学校で、毎年クラス替えしているが、特に問題はない。中学校は全部、毎年替えている。

ただ、学級や教師になじむのに、時間がかかる子供も、以前はいました。しかし、現在は入学前から何年も幼稚園、保育園に行つて、集団生活になれているので、そういう心配は減ってきています。また、気の合った友達や先生なら、二年間くらい一緒にほうがいいという場合もあります。毎年替わったほうが、もっと成長できるかも知れません。

以上のような理由によって、新年度からクラス編成をいたします。ご理解くださいますご協力くださいますよう、お願いいたします。

なお、担任も毎年替わるわけですが、一部の子供は、おなじ先生の「持ち上がり」ということもあります。

三、教室の窓

上地八景



5 百丈山三誓寺

旧国道248号線から山門を目指して階段を上ると、樹齢百年を越すウバメガシの大本が茂る。元禄12年に、当時の上地奉行職早川武左衛門により寄進され、上地を雷の災害から守ったという「長命地藏」も祭られている。